

第 5 章

参加者の声

第5章 参加者の声

伊関之雄

日米学生会議。2週間がすでに過ぎてしまった。5ギガバイトにも及ぶ大量の写真や動画ファイルを毎晩深夜まで眺めていると、どれだけ自分が毎日楽しんでいたかが感じ取れる。

東京

“Harajuku”や“Shibuya”で思い起こされる東京の名所は、初めて日本へ来るアメリカ人にとっては非常に魅力的であったのだろう。フリーの時間になると多くのアメリカ人参加者の頭の中は、カラオケ・買い物・居酒屋・楽しいトコロ…今まで、あれだけ疲れてそうな表情だった子がフリー・タイムになると突然変身してしまう。それだけ東京という場所は彼らにとって心躍る場所であったのだ。その中で、私自身も彼らの行動に同行して“東京観光”へ出向いた。ここで初めて、日本人側としてホストの責務を痛感させられる時が訪れる。日本人の「優しさ・思いやり精神」と「責任・リーダーシップ」をどのようにしてうまく調和させるか、考えさせられた。アメリカ側の提案に対して、話し合いを行う日本人側そして最適な対案が出たと思うと、また違った提案がアメリカ側から出てくる、また日本人側が話し合いを行う…この繰り返して妥協が生まれ結局グループ全体にコンセンサスが出されずに時間のみが過ぎていく。当初は、アメリカ側のアグレッシブな提案の連続攻撃、それに対して考え込む日本人側、という構図が本会議当初では成り立っていた。

私は、この構図にあえて介入しなかった。今後この構図がどう変化していくかを興味深く見ていった。このあたりでは少なくとも、大半のアメリカ人・日本人の参加者はお互いの性質には違いがあることは痛感するもののどのようにしてそれを解していくかのソリューションは見つけることは出来なかった。

秋田

8月7日、私の誕生日。本会議参加者のみんな、お祝いの言葉ありがとう。

東京のようにしてフリー・タイムの間は街に出て、買い物などのような“遊び”はできない。二人部屋をどのようにして全体が楽しめる空間にするかが

問われた。アメリカ側の行動は早かった。私の誕生日会を開くことになると、すぐに準備に取りかかる。私の部屋に人を集めて、音楽を用意し、その他必要な飲食物をセットする。パーティーの開始。私の部屋にいるのは全員アメリカ人。「日本人はみな何をしている」あるアメリカ人の発言。「日本人は他の人の誕生日を祝うことがないのか？」アメリカ人側の日本人に対する懐疑的な感情が見え始める。会議中にあったreflectionの場においても日本人への接し方、議論においてどのようにしたらスムーズに話し合いができるのか、といった議題が目立っていたのも影響していたのであろう。

秋田で参加した竿燈祭り。祭りの見やすい場所を探しに日米の学生が協力を見せなければならぬ時が来た。最終的には多くの学生は大変満足した夜のイベントであった。

広島

宮島から始まったこの旅。日本三景ともあってアメリカ側のみならず、日本人としてもこの自然に囲まれた絶景を堪能していた。自然と人類の知恵と技術で手がけた建造物との調和が、日米の異文化の調和にも少なからず寄与したのではないかと、あの日を思い返して思う。船を降りた瞬間に出迎えた腹を空かした鹿、ロープウェイへの道のりにあった河川でハイキングの疲れを癒し、木々に囲まれた場所でのグループ写真撮影…そしてまた出迎える腹を空かした鹿。自然と双方の学生が調和できた時間を過ごすことができた気がする。このあたりになり、日本側とアメリカ側との意思決定が迅速になってきたと思われる。日本人の意思を聞き入れ、それらに基づいてアメリカ人は取捨選択して行動を起こすといった構図に変化が表れてきた。クラブに踊りに行きたいグループ、バーへ飲みに行くグループ、ホテルのロビーで語り合うなどのグループの形成が可能となり、自然と人の流れがスムーズになり、次第に学生同士のグループが固定化してきた。

京都

とにかくファイナルフォーラムへ向けての準備で、私はようやく熱がこもってきた分科会に一極集中。分科会リーダーが両方ダウンした中、うまく議

論が進んだと改めて思う。

全分科会のファイナルフォーラムも無事終わり、京都の夜の旅へ20名ほどで出かけた。この時、グループでクラブ・カラオケ・居酒屋どちらを先に行くか悩んでいるときに、アメリカ参加者の女の子が私に「ユキオが好きならほうへ行こうよ、だってユキオは案内だけで精一杯なんだし」…と言った瞬間、正直拒絶反応が出る場所であった。あれだけ、東京では案内役の私なんか考えもせず、自分が感じたことしか発言しなかった子が…まさか…

笑話に聞こえるかもしれないが、真剣にこのように感じていた。

私は、JASCのOBの方から城山三郎著の『友情力あり』の抜粋を頂いた。序章・7章・8章の部分を読み返してみると戦前から始まったこの会議においても、私が長々と書いた同じような場面が数多くあったような気がする。城山氏は主に分科会での会議における、日米の間で生じた偏見・妥協・同情・優越心などを描いていた。今年は59回目の会議であったのにもかかわらず、やはり異質の人間同士が感じる違和感や疑念は異世代の間でも、そう変わることがないということが確信できた。所詮、人間同士の対立だったり、misunderstandingなのだ。

よく本会議中に私は、「JASCとは、どうあるべきなのか」「アメリカ人と話をしている中で何か感じるものがあるのか」と自問自答している瞬間が多くあった。腹痛でベッドに横になっていた時間やAIUの図書館のソファで横たわっていた時などいろいろと回想していたのを覚えている。今年のテーマは：「太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～」。私にとってはあまりにも壮大なテーマであったとしか言いようがない。しかし、経験を共にした仲間同士が世界の多数の人々を刺激し、影響しあうことにより、本当の意味で世界における「次代の創造」ができるのであろう。決してJASC内に閉じこもる必要などない。

「次代の創造」へ再出発だ。

…これを狙ってのテーマ設定を実行委員の8人は行ったのであろうか？そうであってほしい。彼らの努力に再度感謝してJASCの旅の総括としたい。

上田 来

この夏が意味すること。～第59回日米学生会議を振り返って～

濃くて、長くて、でもあつという間だったJASCの夏が終わり、その後すぐに他の予定が雪崩のようにやってきて、忙しい日々を数週間過ごした。そのため、JASCのことを十分に振り返る間もなくここまで来てしまった。

今考えてみても、JASCの1ヵ月が自分にとってどれだけ素晴らしいものだったのかは、未だによくわからない。それでも、36人のJapadeleと36人のAmedeleと過ごしたあの夏は、確かに変わっていたと思う。あれだけの大人数で、あれだけの長期間をいっしょに旅し、語り、寝た日々は今まで過去に無かったし、これからも将来にわたって起こることはないだろう。ベッドの上で横になる以外は、いつもだれかといっしょにいた。それが普通だった日々が、今ではどうしようもなく非日常に感じる。

JASCを振り返ることができなかったのも、ただ忙しかっただけではなくて、そんな自分にとって不思議で特別な1ヵ月を、ただ簡素な言葉でまとめることも、陳腐な修辞で美化することもしなかったからだ。やはりJASCは自分にとって特別だったのだ。

1ヵ月のJASCを通して、オレたちは様々な経験をした。アカデミックなディスカッションに始まり、有識者の話を聞き自分たちからも社会に向け発信したフォーラム、観光地を巡るツアー、夜を通して語りあったことなど、毎日が忙しくも充実したスケジュールで埋まっていた。

それでもこれだけ密度の濃い1ヵ月を、あえて一つの言葉で表すとしたら、それはやはり「出会い」だと思う。70人の様々なバックグラウンドを持った人たちとの出会い、そしてJASCという非日常を通して知った新しい自分との出会いがJASCなんだとオレは思う。なぜなら、一人で本を読んだり、映画を見たりしては得られない感情をたくさんの「出会い」から得ることができたから。

新しい知識、新しい価値観に触れたときの興奮。

第5章 参加者の声

たくさんの人に囲まれ、囲み、上手く自分を表現できないことの辛さ。他の人には簡単にできることが、自分にできない時のもどかしさ。知らない者同士が分かり合えた、心で通じ合えた時の喜び。こんな新鮮で時に残酷な感情を1ヵ月を通して経験した。しかもその感情を他の70人といっしょに体験したのが、このJASCだったのだと思う。

1ヵ月間が全て楽しかったといえば嘘になる。自分を相手にうまく伝えることができずに苦労したことは事実だった。それでも、最後のReflectionで、意を決してみんなの前にとって自分の気持ちを吐露することができて良かった。最後の最後で、自分という人間を他のみんなに共有・共感してもらえた気がする。

彼らとまた、会いたい。あの出会いは、あの夏で終わりではなくて、これからが始まり。出会いを通して、新しい自分になる。新しい自分が、またいつかともにあの夏を過ごしたJASCerたちと出会うだろう。その時に再び感じるであろう新鮮な感情に触れるために、またオレはみんなと会いたいと思う。JASCはよくLife Changing Experienceだというのが、まさにその通りである。JASCを通じて、オレはまた変わるだろう。JASCという出会いを通じて変わっていくJASCerたちに、これからもずっと会い続けて生きていきたいと思う。

上野良輔

2007年、夏。

これまでの人生の中で、最も暑い、熱い夏。かけがえのない「出会い」に詰まった、大切な夏。

第59回日米学生会議では、様々な「出会い」があった。東京では高円宮妃殿下をはじめ錚々たる方々とお会いし、秋田ではホームステイ先で地元の方々と交流し、広島では高校生や大学生と核問題について議論することができた。貴重で素敵な「出会い」であった。

しかし、私にとって何よりも大切であったのは、第59回日米学生会議参加者というJASCerとの「出

会い」であった。7月26日に71名が集結してから瞬く間に過ぎ去っていった1ヵ月間、同じ時間、同じ空間を共有してきたその経験は、何物にも代えがたい財産となった。「朝まで生テレビ」が終わるまで語りあったり、日本外交・環境問題・歴史認識について議論したり、新宿の居酒屋で戦ったり、バスケットをしたり、竿燈祭を見学したり、カラオケで絶叫したり、揉めたり、悩んだりしたことも含めて、素晴らしい思い出となった。

そんなJASCerの中でも、私にはとりわけ大切なJASCerがいる。彼とは春合宿で出会い、直前合宿から1ヵ月間ずっと一緒に過ごしてきた。私の日米学生会議は彼と共にあったといっても過言ではない。宮島で泳いだときも、花火をしたときも、半裸でタレントショーに出たときも、たまに夜寝るときも、特にお酒を飲むときはいつも、彼と一緒にであった。中でも一番心に残っている事は、8月18日、新実行委員を決めるEC選挙での出来事である。彼は悩み抜いた末、選挙には出ないと決めていたにも関わらず、締め切り5分前に「出る」と言い出した私のために、合理的に下した決断を捨てて出馬してくれたのである。彼と一緒に選挙に出られて本当に嬉しかった。

もっち、1ヵ月間、どうもありがとう。これからもよろしくね。

こんなアツい70名のJASCerと「出会い」、共に過ごしたこの夏を、私は一生忘れない。

私はこの会議に参加するために多くの方々にお世話になった。多岐にわたる知識のみならず、学問を、人生を教授して下さった大学の教官、書いた文章を読んでくれたり、議論や相談相手になってくれたり、二次試験会場まで付いて来てくれた大学の親友、会議の活動に参加する私のために、週末にも関わらず早朝から協力してくれた両親、そして第59回日米学生会議を創り上げ、私を参加させてくれた実行委員のみんなに、心から感謝したい。

日米学生会議。私は、この会議を知った高校3年生のあの日から、3年間という長い航海をしてきた。

私はあの日、日米学生会議から新たな羅針盤を授かったのだ。

不思議なことに、ここまでの針路は、あの「出会い」の瞬間に定められていた気がする。

だがここからは、私にとって不可視の航路、不可知の海となる。

しかし、私は進み続ける。日米学生会議から授かった羅針盤を胸に。

いざ、次の針路へ。

呉 宣咏

「一期一会」

「今という時は二度と戻らない、今という時間をより大事にしよう。」

これは私が常に思っている人生のモットー的な言葉である。小さい頃から休みには一人で色々なキャンプに行くのが当然なことのようにだった私は新しい人に出会うことには慣れていて、昔から人のことが好きで、誰かと一緒にいる時には笑いが止まらなかった。新しい人に出会い、仲良くなり、それで友達と呼ぶようになったらその後はいつもお別れが待っていた。キャンプが終わってそれぞれ日常生活に戻ってもずっと連絡しようねといつも約束するが、その連絡が長い間続くのは実際難しいことである。離れてから、会えなくなってからその時もっと話せばよかった、もっと仲良くなればよかった等の後悔が多い。それは人に出会うときだけに限らず、仕事や勉強をする時にも影響を与える。今年の正月、周りの友達に送った年賀状に書いたのが私の中で私が生きている今をもっと大事にしようという思いを確かめたきっかけになった。日米学生会議に参加したその1ヶ月は毎日新しく新鮮だったのである。気楽にいられる場所で一秒一秒新たな感動を感じた。その感動から自然に出てくるみんなの笑顔を中心に刻み込んでおきたくて私はもっと笑っていてお互い笑いながら小さくなった目を通して心の対話ができただけかもしれない。先輩達からは日米学生会議のことがLife Changing Experienceであったとよく聞く。しかし、本会議中はその言葉に疑問を持っていたデリ

が多く、私もはっきり見えないその答えをさがそうとしていた何人かの一人だった。その時の答えは私にとって日米学生会議はLife Changing Experienceではないと言っていた。確かに良い経験が出来たというには間違いはないが、人生が変わるほどではなかったと言っていた。でも会議が終わってからもう20日が経った今はもし誰かに聞かれたら、日米学生会議はLife Changing Experienceだったと言える。それは私が大事にしようとしていた一分、一秒の時間の中でLife Changing Experienceはいつも起こっている。人は人生を変えてくれるような経験といえはとて大きくてははっきり見えることではないと、それをLife Changing Experienceと思わない。しかし、人生を変えるような経験は実際とても大きいイベントであるかもしれないが、日常生活の中で友達の話の中で耳にした話から本当の自分に気づくこともあるし、それでもっと良い自分になろうとしたらそれはその人にとってLife Changing Experienceだと言えるのではないのか。本会議中には多くの人数に囲まれている中で本当の自分に向き合うのができたと思う。自分にちゃんと向き合っ客観的に見ることができたというだけでLife Changing Experienceができたと思う。本会議中だけでなく会議が終わってからもっと進んだ自分に会いたいと思ったらそれでその人の人生は少しずつ変わってくる。Life Changing Experienceは私達の隣で、私達の中で今も起こっている。そのチャンスを掴み取れるかどうかは自分次第なのだ。

角田亜紗子

「朝5時半にラクロスの朝練に向かうため家を出る。後期に取る授業を友達と相談しながら決める。雨が降ると犬の散歩をしなくて済むからホッとする。」

私は第59回日米学生会議が終了して以前の生活に戻った今も、2007年の夏が夢のようで、未だにその経験を消化し切ることができていない。この学生会議は私にとって壮大であり、かけがえのない時間と友を与えてくれた。4つの都市を回りながら開催された会議の中で、日米の国境に気付いたり、時には

第5章 参加者の声

その国境が消えたり、夜が更けていくことを忘れ語り明かしたり、知らなかった母国日本の美しさに自ら感動したり、まさに日常の中の非日常を体験していた。

この会議に私が参加出来たのは様々な人のお陰であった。まず、会議自体を私に紹介して下さった我がサークルのOB天野氏。受けるように強制、いや薦めて下さった国際部部长トッティー氏。受けるべきか迷っていた時に背中を押してくれた両親。参加が決定した時に部活を長期間休む私を受け入れてくれたラクロス部の仲間たち。本当に本当にみんなに感謝を伝えたいと思う。

では、そんな人々に私はこの体験が自分に何を教えてくれ、何に気づかせてくれたと報告するだろうか。多分全てを挙げると卒論を書く羽目になるので2つ挙げれば、多様性の重要性と「可能性」の発見だろう。

広島で第二次世界大戦中の原爆の使用の是非について分科会で議論していた時の事である。そこでは様々な意見と感情が息苦しくなるくらい錯綜していた。「科学の進歩が止められないように、原子爆弾の使用は止められなかった」「広島と長崎が原爆の恐ろしさを教えてくれたことにより冷戦中原子爆弾は使用されなかった。つまり、この犠牲は以後の国際社会に大きく貢献した」「たかが原子爆弾が落とされただけなのに広島と長崎は特別扱いされている」「私がトルーマンの立場であったとしても原子爆弾を日本に利用していただろう」余りにも私と意見が違うので絶句もしたし、その意見を聞くことの辛さで友達と肩を抱いて泣いたりもした。しかし、私にとってその場で聞いたすべての見解は大切だったように思う。全ての意見が正しいと言っているわけではない。ただ、自分とは異なる意見を言う同世代の人の存在を実際知ること、深く自分の意見と向き合い考えなおす機会を私は与えられた。そして、この機会のお陰で一層自分の考えの脆さ、そして同時に正しさを再確認した。そのような自己の考えの

形成のためにも意見の多様性は重要なだろう。

そして、「可能性」。自分自身の英語力やコミュニケーション能力の向上の可能性。学生たちの情熱で世界を変えることができる可能性。“What about…”の生む笑いの可能性。そして、日米両国の世界貢献への可能性。私はこれからの21世紀社会の主軸となっていくであろう学生たちと1ヵ月衣食住を共にし、彼らの問題意識の高さ、好奇心の強さに感動した。そして、その彼らが引っ張る日米両国の未来への希望は確実に育っていると感じた。私たち学生は内に大きな夢と希望を抱え、それを実現させるための情熱に溢れている。そしてこの情熱は様々な扉を開ける「可能性」に繋がっているだろう。

第59回日米学生会議は、思い出にまだしたくないくらい今の私にとって大切なものだ。この1ヵ月は私の全てではないが、私の人生において必要不可欠な時間だったと思う。

そして、そんな時間を共に過ごせた71人の仲間一言！

Best wishes for all of your futures and love you all tons! Don't forget about me (^o^)/

加納康宗

JASCが終わって20日近く。今から振り返ると夢のようだけど、確かに存在した非日常の1ヶ月。東京の街を慣れた感じで歩いている時も非日常を強烈に感じた。全て日常を基盤としながらも、1つ1つが貴重な非日常だった。

実は今もJASCのことを思い出してばかりいる。最後の方にみんなの前でしたスピーチは毎日心の中で反響している。「非日常との別れ」は心の中で明確にしたつもりだけど、やっぱり寂しい。戻ってきた日常に違和感はないけど、JASCerに会うと少しだけあの世界に戻れた気がして嬉しい。

このJASC全体を感想文にしっかりとまとめるのは不可能だし、最後のレセプションで「私の経験」を数分間スピーチする前も話題を絞るのが辛かつ

た。強引にまとめてGW（春合宿）からの日々が陳腐に見えるだけかも知れない。しかしお世話になった世間に送り出す報告書である。ここはその巻末に用意されたpureな主観の場である。小論文としては失格だけど、JASCの感想を徒然に書く。即ち“JASC徒然草 ダイジェスト版”

期末試験の終わった3時間後に興奮状態でオリセンへ駆け込んだ。7/25.13:30→30分遅刻。アメデリを迎えるまでの30時間、オール日本語空間が刻々と名残惜しくなる。ワクワクすると同時に一抹の不安が膨張していく。意見の背景となる個人的事情まで互いに理解した4人のRTに5人が入り、全て英語でコミュニケーションすることになる…。

遂にアメデリが来た。「武邏弩」と墨で書いたシンプルな扇子を持ってバスの前に行き、Bradを迎えた。古いステレオタイプだが、見た目も声も絵に描いたようなアメリカ人だと思った。アメデリ全体にアジア系と黒人（African Americans）が思ったよりも多いことに少し驚きながらも、興奮を抑え切れなかった。全く未知なアメリカの学生36人と1ヶ月間の“同棲”生活 in Englishを送り、生涯の友達とLife Changing Experienceを得ると聞かされていた。遂に始まったのだ。

思い出を具体的に連ね始めると本当にキリがなくなる。僕はあまり感情的にならない気質だが、あの1ヶ月間には喜怒哀楽も笑いも涙も汗も緊張も安らぎも孤独もドキドキも連帯感も憂鬱も沈没も・・・全てがあった。なかったのは暇と日常だけ。またマジメな議論も遊びもコイバナ（←脇役でした ^^;）も全部あった。そこになかったのは僕のJASC-love。ただあまり話せなかったアメデリもいたのは残念。英語で積極的になれなかったからだと思う。TOEICや大学受験の英語をバリバリやったところで、早口でスラングも入る日常会話となると訳が違ふ。アメリカ滞在経験を持つジャパデリとの落差を感じた。分科会や普通の会話の後に噂話やコイバナまで英語で積極的に入れるかどうか1つの分かれ目だったと思う。議論での「内容で頑張るしかない」

という以前からの心がけは正しかったと思うけど、当然それで全てが解決できる訳がない。日本語なら簡単に分かる程度の気質や癖も、英語だと時間がかかる。少なくとも中高では加点法的に評価された英語力も、JASCにいると（完璧からの）減点法自己評価になる。でもこれは本当に嬉しかった。

いつだろう、海外経験アリの割合の高さに抱いた劣等感が消えたのは。いや自分で自分を誤魔化して消したのだ。本会議が始まる頃、英語に困って当たり前という意識を押し殺したのだ。プライドなのか、諸刃の刃である「根拠なき自信」なのか、分からない。でも卑屈にだけは意地でもならない自分に京都で気付いた。

分科会は国際交流の古き理想を体現したと思う。トピックは、政治も思想も感情もモロに絡むナショナリズムや歴史、民族。互いの思いをぶつけ合い、政治や歴史・文化を語り合い、幼稚だったら絶対喧嘩になる所を互いが理性的に反論し、それでも時に感傷を隠しきれず・・・そんな中で僕は参考人宜しく自国を語っていた。歴史は小中高時代の趣味（歴史の漫画や雑誌）と受験勉強のご利益を感じた。もはや一般論だが、外国人と話すとき自国の教養の大切さを思い知らされる。内輪ネタだが、Nancyと僕の議論はPBと並ぶ“Dangerous RT”の象徴的存在だった。3通のJASC-mailと京都でのスピーチはNancyへのrespectだった。

SchlachetとBoの日本に関する知識には驚いた。彼らと日本の歴史や文化を議論するのは楽しくて仕方なかった。もっともっと話したかった。「神＝God, gods」とする辞書にはよく疑問を抱いた。でも何となく、I love 八百万の神。

JASCでは尊敬できる人たちにたくさん出会った。別れてからの寂しさは半端ない。アルムナイ同士になっちゃったけど、いつまでも繋がりを保ちたい。

JASCはある意味で魔法だ。1ヶ月間とはいえ、72人に共通の強いidentityを抱かせるのだ。非日常を共有したから？ いやそれだけではない。でもこのidentityが全体の仲間意識を指すなら、1ヶ月間

第5章 参加者の声

特殊な空間に全てを晒してある種の戦友や同志になったからだとは今は解釈する。ただこの解釈も有形無形に影響を受ける将来の中で変遷するであろう。そしてこの再解釈はpost-JASCの重要な一面なのだ。

参加前からこの1ヵ月+事前活動が果たしてLife-Changingなのか疑問に思っていた。でも今は自信を持って言える。Life-Change by JASCはlet it happenではなくmake it happenなのだ。JASCで本当に沢山の思い出や友達が出来たし、自分を見つめ直すことも出来た。受けてきた沢山の影響はこれから自分の中に浸透して自分の思考や行動を変えていくのだろう。JASCを「楽しい思い出」で終わらせてはもったいない。JASCは参加者が自身を通して他人や社会に生かしてこそ最大限に意味を持つ。京都のファイナルフォーラム後に高々とスピーチした(エッセイ参照)時の自分は今も自分の中で毎日スピーチしている。JASCersは社会と歴史の期待と要望を負っているのだ。選民意識ではなく、自らの可能性と社会的役割を見出すことの重要性を強調したい。

“JASCは本会議が終わってからが本番だ”という言葉がある。1人のOBとなった今、JASC syndrome (JASC-familyへのhomesick) 対策も兼ねて1つ解釈を加える。“本番は地味なところにこそ見出されるべきなのだ”

Japan-America Student Conference, banzai.

川口耕一郎

ちょうど一年前、59回 JASCの理念を話し合うための理念合宿に向けて、委員長としての抱負を書き上げていた。期待と不安が重なる中での文章だったが、報告書の間を借りて、その抱負を今一度読み返し、委員長としての一年間を振り返ってみたい。

委員長としての抱負

1. 59回JASCの顔として

委員長として当然の役割だけど、対外的な仕事からこれから多くなる。これはEC全員に共通したこと

だけど、外部の人は自分達を見て59回JASCを判断する。だから、好印象を持ってもらえるように、OB、企業、一般学生と接する時は、常にJASCの意義だとか、59回の理念とかをしっかりと伝えられるようになりたい。そして、口コミが一番の宣伝になるわけだから、JASCの素晴らしさを周りの友達に熱く語って、アピールしていきたいな。

2. 全体を見渡せる広い視野

これからECのみんなはサイトと分科会を持つことで、自分の仕事だけで精一杯になると思う。そこで俺が第三者の視点から、全体のバランスを取っていく。まずサイトは、他と比較しながら、各サイトで自由時間がきちんと確保されているかとかを横断的に見ていく。そして分科会に関しては、各分科会の議論がきちんと進行しているかを常に確認して、全ての分科会が一定のレベルの成果を発信できるように、アドバイスをしていく。本会議中はどこまで時間があるか分からないけど、分科会にはどんどん顔を出していきたいし、俺も一人で寂しいからみんな仲間に入れてね。いつもみたいに喋り過ぎて、邪魔するとかはしないからさ(笑)

3. 常に余裕を持って、楽しむ

これからは財務活動とかサイトコーディネーターとかで外部と接することが増えてきて、ECとしての仕事も大変になっていくと思う。想定外のトラブルがあるかもしれないし、みんな壁にぶつかるかもしれない。でも、そんな時だからこそ委員長はみんなを励ますぐらいの余裕を持たないといけないと思う。トップが凹んでたら、その組織全体にそれが伝染するから。そして、常に2歩、3歩先のことを予想して、どんなトラブルにも冷静に対処できる余裕を身に付けていきたい。それに何よりも大事なものは、ECとしての活動を楽しむことかな。ECの仕事は、社会のためでもなく、家族のためでもなく、自分自身のためにやるもの。そしてなんでやるかって言ったら、楽しいから。そんな気持ちを最後まで忘れないでいたい。常に笑顔で、EC8人で和気あいあいと活動できたらいいよね。

4. 尊敬されるよりも、感謝される委員長になる

俺が一番意識したいこと。委員長には色々なタイプがいると思う。多分OBの話を書くかぎり、今までの委員長は自分の分科会を持ち、対外的なこともする、仕事をバリバリこなす万能な人だったように思うし、そんな人が評価されていたのかな。でも俺はそれが理想の委員長像かというと思わずもそうじゃないと思う。

俺が目指しているのは、デリ一人ひとりに目を配って、彼らが快適に楽しく1ヵ月を過ごし、自分の力を最大限に発揮できるような環境を作っていくこと。それは正直かなり地味な作業だと思う。自分の分科会を持ったりするのは目に見える形で成果がある。でもデリに気を配ってことは、もしかしたら誰にも気付かれないうちかもしれない。

この前OBと会った時に、分科会を持たないことを言ったら、かなり厳しく批判された。「やる気がない」とか「責任回避をしている」とか。でもその時彼らに言ったのは、俺は別にやる気がないからでもないし、楽をしたいから分科会を持たないんじゃない。自分の分科会に費やす労力を、JASC全体のために還元したいから。JASCの最大の意義を「絆」だと思うから、それを生むデリ同士の交流が活発に行われるような環境を作っていきたい。バリバリ仕事をこなす委員長の方がカッコイイし、たぶん尊敬される気がする。でも俺は8月20日にデリに「すごい」って尊敬されるより、「ありがとう」って感謝されたい。もしかして本会議中は気付かれないうちかもしれないけど、後になって振り返って、この委員長がいたからJASCを楽しめたって思ってもらうことが一番の目標かな。

改めて読み直すと少し恥ずかしいが、一年間を通して初心を貫徹することができたのではないかと思っている。

私がJASCに対して抱いていた理念。それは、「太平洋から世界へ〜グローバルパートナーシップの探究と次代の創造」というテーマに全て反映されていた。一年間の活動を通して幾度か修正はされたが、

参加者の絆を深め、社会に開かれた「史上最高」の会議にするという二点にあった。そして、理念を実現するために実行委員16名、特に開催国の日本側実行委員8名の結束を強めることを最優先して日々の活動に取り組んできた。

参加者の絆を深めることは、日米の学生による相互理解、信頼醸成を目指す会議伝統からも自明であろう。そもそも実行委員長に立候補したのも、もう一度58回のような暑い夏、暑い仲間を生む会議を自身の手で作りたいという思いがあったからだ。アメリカから帰国して間もない頃は、「絆」、59回テーマで言えば、「グローバルパートナーシップの探究」の実現を最も重視していたように思える。

しかし、委員長として財務、広報活動、秋田サイト担当者として本会議の企画を進めるにあたり、「絆」に加えて、会議の「社会発信」という新たな基軸が加わった。そこには、自分達の活動を多くの人に知ってもらいたいという気持ちもあった。だがそれ以上に、社会から多くの協力を得ながら、外に開かれない閉鎖的な会議運営に対する批判を様々な場面で受け、会議の成果を社会に還元すべきではないかという問題意識からの衝動によるものであった。閉鎖的な会議運営を続けていたら、いずれ会議が終わる日も近いかもしれない、いや59回自体できないかもしれない。資金不足を理由に希望していたサイトを変更することを強いられた時は、61回以降のJASC日本開催存続自体に強い危機感を覚えた。その時からだ。59回だけでなく、60回以降、特に日本開催のJASCの未来につながる礎を、この59回JASCで築いて見せると言い聞かせるようになったのは。

「72人の学生が素晴らしい経験を積む意義は分かります。でも、それだけで具体的な協力にはつながりません。」

そう幾度となく大人達に跳ね返されながら、日本側実行委員で社会発信の意義、実現可能性を話し合った。社会発信とは言っても、学生による1ヵ月の

第5章 参加者の声

短期間会議という制約がある以上、限界がある。前年度の58回でも、分科会の成果を通して社会発信を目指したが、それが必ずしも実現したとは言い難かった。更に、発信する手段は何か、媒体は何か。東京はまだしも、秋田、広島、京都で大規模な発表の場を素人の学生実行委員に作る事が出来るのだろうか。実行委員会発足から半年近く実行委員内で幾度となく話し合ったが、答えは出なかった。

考える前に、行動に移さないと。見切り発車ではあったが、東京、秋田でそれぞれ一つずつフォーラムを企画した。学生のオピニオンリーダーとして社会問題に対して提言を行いたい。国際交流の先駆けとして、同年代の学生に刺激を与えたい。そして、フォーラムを通して社会に開かれた、社会にとっても有意義なJASCを築きあげたかった。幸いにも、東京ではJASCジャパン、アジア財団、そして秋田では秋田日米協会にそれぞれフォーラムの主催団体として全面的なご協力をいただいた。箱はプロが作り、我々学生は中身を埋めるという連携が生まれた。大人の経験、学生の熱意が融合したことで、素晴らしいフォーラムになり、会議の成果の真の社会発信がはじめて可能となった。

そして、以上の「絆」、「社会発信」の実現には、実行委員会の団結が不可欠だと感じていたが、日々の実行委員としての仕事、理念の話し合い、参加者の選考などを通して、個々人の会議に対する思いも共有できたのではないかと思う。そして、互いに信頼できる仲間になることができた。一年前、実行委員が会議企画、運営に要求される信頼関係を築けるかが不安だった。お金をもらうわけでもない。地位、名誉を得るわけでもない。学業、就職活動などと両立させながら、時としてプライベートを犠牲にして、全てを会議に捧げることが求められる。実行委員の会議に対する情熱、互いの信頼関係が成熟してはじめてJASCは成立する。59回は、その二つの要素を各自が共有したからこそ、無事終えることができたのではないかと思う。

一年間の集大成である最終サイト京都。あろうことか、ファイナルフォーラム前日に体調不良で倒れてしまった。一人ベットに身を隠していた時、発表の準備に向けたデリゲートの声が聞こえてきた。ふがいなさ、寂しさ。「俺」のJASCだったのがという孤独感。だが、ふと充実感に浸ることもできた。一年前は、開催国側の実行委員長として一人で会議を背負っている錯覚に陥っていた。そして、自分の会議に対する情熱が、他の実行委員、デリゲートに共有されれば、会議は成功すると確信していた。そんな一年越しの夢が今、目の前で実現している。自分が寝込んでいても、問題なく他の実行委員が会議を運営してくれている。デリゲートが情熱を持って「史上最高」のフォーラムにしようと言いながら準備をしている。「俺」のJASCが一年後には「全員」のJASCに。恋人のような存在だったJASCをこれ以上独り占めできない寂しさもあったが、体中から湧き上がる感情は今まで経験したことのないような達成感、充実感だった。

抱負では、尊敬されるよりも、感謝される委員長になるなどとクサイことを口走っていたが、本会議直前に一時は仕事をこなしながらも、余裕を持ってデリゲートに接する「カッコいい」委員長を目指そうと目論んでいた。でも、やっぱり最後までカッコつけることはできなかった。デリゲートの前では地味な役回りだったけど、汗かき屋に徹したからこそ初志貫徹することができたと思う。

この1ヵ月で、自分の限界も知り、挫折も味わった。会議の運営上に課題もあり、多くの関係者の方々にご迷惑をお掛けした。しかし、そんな時は常に実行委員、デリゲートのみんなが支えてくれた。委員長が会議を先導するのではなく、支えられるとは全く情けない話だが、それも59回が成熟したメンバーに恵まれていたからに違いない。

60回実行委員選挙後、新実行委員の何人かがこんなことを言っていた。

「59を超えて、来年は史上最高の回を目指そうぜ!!」

「史上最高」の回。去年は、私が口に出すだけで実行委員からも失笑がもれていた。でも、今年は違った。毎年の実行委員会が団結して「史上最高」の回を作り出すことに一年間情熱を傾ければ、必ずデリゲートは付いてくる。そして、JASCの永続も約束されるだろう。

菅家万里江

2006年、8月も終わりに近づいた日の黄昏時、サンフランシスコの海辺で私は一人思いをめぐらせていた。遠くでは他の参加者の笑い声が聞こえるが、私の声その中に交わることはない。第59回日米学生会議実行委員選挙を翌日に控え、私は海を眺めながら自分に問いかけていた、「やるか、やらないか」。葛藤の最大の争点となったのは、「果たして自分にそんな能力があるのだろうか」ということだった。すでに学業と学外のスピーチ活動で両手がふさがっていた上に、第58回日米学生会議で取り立てて目立つ存在でもなかった私が、70年以上も続く伝統ある会議の日本開催の実行委員という重役を引き受けていいのだろうか。答えは出ず、ただ悪戯に時間だけが過ぎてった。目の前に広がるフレスコ画のような海は、半分は暗い雲に覆われ、半分は真っ赤な夕焼けに染まっており、私の未来の選択を暗示するようであった。

宿泊先に向かうバスの中で、今回京都サイトを手伝ってくれた第58回参加者の真田が「一緒に委員をやるう」と話しかけてくれたが、自分に迫り来る大きな決断の時のことで頭がいっぱいで、なかなかうまく話をすることが出来なかった。それほど、委員に立候補することは私にとって大きな選択だったのである。そのためか、バスを降りた後、果たして自分が何をしていたのかよく覚えていない。気がつくと、服も着替えぬままベッドの中で眠っていた。

部屋の扉を開けたとき、仲良くしていた参加者の一人がニコニコしながら話しかけてくれた。「マリ一、委員に立候補するんだね、頑張ってるね!」その

言葉にあっけにと取られてしまった。私は立候補用紙に自分の名前を書いていなかった。信じられない気持ちで用紙が貼ってある扉の前に行く。

そして、そこには、私の名前があった。

驚きもあったが、嬉しい気持ちがこみ上げてきた。自分では言語の壁、知識の無さに阻まれて、この会議に全然貢献できていなかったと思っていた。しかし、誰かが私を信頼し、委員に足る存在として私を推薦してくれた。それが、言いようもなく嬉しく、有難かった。思い返してみれば、挫折しそうなどき、臆病になりそうなどき、不安などき、誰かがいつも私の側にいてくれて、私の背中を押してくれた。それが日米学生会議だった。そんな会議と、すべての支えてくれた人、そして私の名前を書いた人に恩返しをしたくて、委員に立候補することを決めた。選挙の約一、二時間前のことだった。

あまり準備する時間も無かったため、選挙では、自分が素直に思ったことを伝えた。そして、幸運にも当選することが出来た。

川口が実行委員を務めることが決定した後も、副実行委員長長の座は空いたままだった。副実行委員長に興味はあったものの、ここでも私は自分を信じきれなかった。果たして、自分にそんな器があるのだろうか。そんな重役について大丈夫なのだろうか。怖い、不安だ、逃げたい。そんな思いが心を渦巻いていた。そんな時、川口が声をかけてくれた。

「副実行委員長やらない?」

川口としては、一向に決まらない委員の役職決めに業を煮やただけだったのかも知れないが、彼の言葉が不安を解きほぐしてくれ、また自分を信じる事が出来た。こうして私は、第59回日米学生会議副実行委員長に就任することになった。

それからの年月は、まさに、失敗と挫折と苦悩と焦燥、そして喜びと達成感の一年であった。川口をはじめ当会議の実行委員全員が私よりはるかに高い能力と人間性を兼ね備えており、そのような人々と一緒に仕事が出来てを光栄に思う反面、自己嫌悪に陥ることも何度もあった。特に、副実行委員長

第5章 参加者の声

としての立場、役割といったものもよくわからず、どのように動けばこの会議に貢献できるのか、始めは全くの手探り状態であった。その上、大学二年次に70単位を申請していた私にとって、学業と日米学生会議の仕事の両立は難しく、なかなか思うように仕事を進めることが出来なかった。毎日毎日、自己嫌悪と疲労感に悩まされていた。

状況が変わり始めたのは、12月の報告会の頃であった。それによって、第58回会議の終焉と、第59回の胎動を強く感じ、自分が次の会議を担っていくのだという使命感を改めて強く感じた。また同時に、「副実行委員長という不安定な立場」から脱却するため、歴代の実行委員長の方に「実行委員長が望む副実行委員長像」をうかがうこともはじめた。その中から、副実行委員長に求められていることは、「チェア（実行委員長）と同じビジョンを持ちながら、チェアが至らない部分を補填する」こと、「チェアとバイスの両方で完全な状態になるようにする」ことであることがわかり、それからは川口との連携により重点を置くようになった。これ以降、川口とよく話し合う機会を持つようになり、お互いの長所短所を指摘しあったり、委員長と副委員長の仕事の分担を決めたり、委員会の現状について多く意見を交わしたりした。これによって、今まで川口だけが抱えていた仕事の負担をお互いのコンセンサスの元でうまく分担できるようになった他、委員会内外の情報をシェアしあい、「チェアとバイスのツートップ体制」で委員会運営を行っていくという方針を固めることが出来た。これが、私の意識を変えることとなった。この頃から、手帳の余白に書かれたタスクの量も次第に多くなっていった。（尚、少々話はずれるが、会議を終えて強く思うことは、「チェアとバイスのツートップ体制」こそが、過剰労務に陥りがちな実行委員長を助け、他の委員と委員長のギャップを埋める最良の方法であるということである。この体制を次代にも引き継いでいきたいと思う。）

春休み及び三年次になってからは、ほとんどの時間を日米学生会議に費やすようになった。春休みには、主に講演会の統括を行ったり、選考の補助とし

て働いたりした。また、第一・二回秋田出張を行い、秋田サイトのコーディネートを本格的に始動した。尚、この出張のことは川口がサイトコーディネーター後記で詳しく記述しているのでそちらをご参照いただきたい。その後も、春合宿の全体責任者を担当したり、秋田サイトの総責任者として秋田サイトに関する全体の責任を担うようになっていたりした他、副実行委員長として外部の方とお会いする機会も増え、会議へのコミットメントは着実に増えていった。春合宿後は、サイトの最終的な詰めと、分科会運営、及び賛助会理事会等への出席などに追われた。迫り来る本会議への緊張と、実際の参加者と会議を作っていく面白さに、睡眠時間が短くても疲れを感じなくなっていく。特に、分科会のメンバーとの毎週末のミーティングが楽しみで、土/日の午前中はずっとミーティングと称した井戸端会議に費やしていた。会議参加者が私に仕事を乗り切るエネルギーを与えてくれた。

あれだけ時間と労力を費やしてきた本会議は、仕事に追われるうちにあっという間に過ぎていった。そんな中、自分の能力の限界に直面することもあったし、周りの人たちの温かさに胸動かされることもあった。また、自分と社会のつながりをよりいっそう肌で感じることになり、自分がこの世界に組み込まれていることを強く感じた。そして、将来はこの世界のために何か貢献できる仕事につきたいと心から思った。71人の参加者と泣き、笑い、苦悩し、真剣に議論しあい、忘れられないひと夏をすごせたことは、私の一生の思い出である。

また、この会議を通して本当に成長することが出来たと思う。外部の方との折衝、副実行委員長としての責務、分科会の運営、委員との協力、秋田サイトの運営とフォーラムでのパネリストの体験、すべてが私の糧となったし、本当に色々学ばせていただいたと心から感謝している。実行委員の皆、参加者の皆、歴代の実行委員の方々、アルムナイの方々、そしてお世話になった皆々様に、心より感謝の意を表したい。

特に、実行委員長の川口には、本当に色々なことを学ばせてもらったし、様々な場面で支えてもらっ

た。様々なアクターの狭間で悩み、大変な思いをしたと思うが、どんな仕事も正確かつ着実にこなし、第59回日米学生会議の成功に向けて身を粉にして貢献してくれた。本当に偉大で、心から尊敬できる実行委員長だった。副実行委員長として、彼は歴代の日米学生会議で史上最高のチェアであったと心から思う。

2007年8月20日、第59回日米学生会議は終焉を迎えた。サンフランシスコから一年間、私が副実行委員長として日米学生会議運営に従事してきた長いようで短く濃密な年月が、ついに終わりを告げた。あれから約3週間が経過し、今私はVirginiaのthe College of William and Maryに留学に来ている。膨大な量の宿題に追われる毎日でも、この会議のことを思い出さない日はない。そしてそれはきっとこれからもずっと同じだろう。

菊池なつみ

JASCに参加した1ヵ月、それは不思議な世界だった。朝起きると仲間がいて、自分からえいやっと動き出さなくても、良い刺激にさらされ続け、常に挑戦する機会が与えられ続けていた日々。今から思うと、その日々は信じられないほど恵まれていた特殊な日々だったのだが、私はその日々をあまりにも当たり前を受け取って、ただ楽しんでいた。そして、その特別な日々は私の日常となり、59thのデリ達の存在が自分の中に当たり前のもので浸透し、ずっとこの日々が続いていくような不思議な感覚に捉えられていたので、その日々が終わりをつげの日になってもそのことをしばらく実感できずにいた。フェアウェルパーティーで感動的な言葉を聞いても、アメデリが早朝のバスに乗るのを見送りに行き、別れの言葉を交わしている間もまだ信じる事ができずにいた。アメデリがバスに乗った瞬間、本当に自分の側から彼らがいなくなった瞬間、これ以上現実を否定できなくなった瞬間、次から次へと乱暴なまでに零れ落ちる涙を抑えられなかった。

JASCに参加した前後で自分の何が変わったのか。客観的に見ると、自分がJASCに参加したことによ

って大きく成長したとは言いがたいかもしれない。内向的な性格は相変わらずだし、積極的にボランティアに参加するようになったわけでもない。ただ、私そのものは大きく変わることができなかったとしても、自分の中に世界が一つ増えた、そんな気がする。その世界は、義務感と少々のプライドから読んでいた灰色の新聞の国際欄に彩りを加え、ニュースの背景に人々の顔や考え、意見、生活を思い浮かべさせる。その世界は自分の限界と、他者の魅力を教え、もっと知りたい、関わりたい、学びたい、そう思わせる。きっと、JASCで過ごした1ヵ月は、自分の中に時間をかけて浸透していき、やがて自分の一部となり、自分を変えていくのだろう。JASCで過ごした1ヵ月をこれからどう生かしていくのか、自分がどのように成長していくのか。自分が本当に試されているのは、これからなのだと思う。JASCに参加して本当によかった。この強い想いが、数十年後により深みを持っていえるようになることを願って。

金 大鐘

「プライスレス」

ありきたりの単語だが、JASCを形容するにはこれしかないだろう。

お金では買えない経験をいくつもして、多くを学んだこの1ヵ月。

東京では世界銀行でパリとガーナの学生とテレビ会議を通じて議論をし、アジアユースフォーラムでは高円宮妃殿下とお会いし、横須賀基地ではシーファー駐日大使とも話した。オリンピックセンターの洗濯所では、男二人で筋トレをしていたらアメデリの女性に見られ、本気でゲイと間違われた。プライスレス。

秋田では、ホームステイ先で美味しいご飯とお酒を飲みながら世界情勢について論議を交わし、白神山地や竿燈祭りを訪れ、日本の大自然や地元の伝統を肌で感じる事が出来た。自身は、秋田フォーラムでは明石元国連大使と茂木健一郎さんに続いてスピーチもこなした。また滞在先である国際教養大学の寮の一室は、毎晩パーティールームと化し、昼間に見せるシリアスなアメデリの姿と夜の姿とのギャ

第5章 参加者の声

ップにただただ感心してしまった。プライスレス。

広島では、原爆ドームと平和記念資料館を訪れた際に、色々な国の言語が飛び交うのを聞いて、広島は世界の平和を象徴する都市なのだと改めて感じ、また地元の高校生や大学生の平和に対する意識の高さにも驚かされた。宮島観光では、あの世界遺産である厳島神社の鳥居の横で、海水パンツ一丁で泳いだりもした。プライスレス。

京都ではファイナルフォーラムに向けて日米一つになってプロジェクトに取り組み、徹底的に議論を重ねた。厳しい暑さや門限の厳しい大学の寮にステイしていたこともあって、体調不良者やストレスアウトするデリが続出。フリークアウトしたアメデリ女性に「Bitch!」と言われ、男性にも「Bitch」という単語が使えることを学んだ。プライスレス。

しかし何よりもプライスレスなもの—それは自分が「JASCer」の一員になれたという事実である。それは今後一生涯消え去る事のできない事実であり、大きな財産であると思う。「JASCer」というだけで、これまで出会えなかったような人たちと出会い、訪れなかったような場所を訪れ、経験できなかったようなことを経験できる。そんなJASCに参加できたことを誇りに思うと同時に、この会議の歴史を創り、支えてきた先代の方々から心から感謝したい。プライスレスなひと夏をありがとう、JASC!

櫻 静香

私にとって、JASCというものは、アカデミックなフォーラムに参加することでもなく、日米代表の学生の会議でもなく、日常的で何気ないながらも印象的なディスカッションの場面の集まりでした。会議初期の分科会では、アイスブレイキングとして行った自己紹介で、人は単なる日米でくれないということを実感したジャパデリ。人種も育ってきた環境も特に多彩であったアイデンティティの分科会では、「アメリカ人」でありながらアメリカから完全に国民と認められないことでの心の葛藤を訴えるメンバーの言葉もあり、国籍と、民族と、アイデンティティのずれから生じる問題に気付かされることが何度もありました。また、わずかに数回目の分科会で

ありながら盛り上がるメンバーを横に、議論が理解出来ず、雰囲気にも馴染めない悪循環に陥った私。そして、その事実を分科会の時間で話すことにより、アイデンティティのメンバー全員が、皆がついてきていることを確認しながらディスカッションを進めるスキルを備え始めた時期。自分自身も、その後は驚くほどのスピードで意見を述べられるようになったことによる、最高の満足感。問題を抱え、ホームシックになり、それを仲間に告白し、仲間の助けによってそれを克服していく。それは、まさに起承転結を含む分科会でした。

それぞれのサイトでも、そのサイトに訪れるごとに、私たちのディスカッションに普段とは全く違う話題や雰囲気を提供してくれました。特に、晴天の広島の空の下で、サンドイッチを食べながら原爆について話し合った時間。その瞬間は、言葉に表せない程心に残っており、このJASCでこのような素晴らしい青春をさせてもらえることに心から感謝しました。日本人として、アメリカ人として、又は一人の人間としてどう原爆を見るのか、そして、自らのバックグラウンドの理由を交えて、なぜそのように考えるのかを話し合ったこと。その分科会の輪は、いつしか知れず他の分科会のメンバーまで交えて膨らんでいたのが、今でも印象的です。広島サイトは、日米に直接関わる問題であるために、アメリカ人の学生と、日本人の学生どちらが欠けていても出来ないディスカッションのチャンスを作ってくれました。日米代表として選ばれたとはいえども、まだ無力な私たちが世界の問題に関するきれいな解決策で留まるのではなく、私たち自身に直接関わる問題についてどう感じているのかを理解し合えたというこの機会を与えてくれました。

この、それぞれの立場の者が、一堂に会し、双方に直接関わる問題に関して、語り合い理解し合おうとするディスカッションの積み重ねであるJASC。これが私の日米学生会議です。

佐藤逸美

私が、JASCのプログラムを通して一番心に残ったこと、それは、ファイナルフォーラムに向けて取

り組んだグループディスカッションです。

最初の頃は、アメデリとジャパデリの間に大きな溝がありました。気が付くと、議論がアメデリだけで進められていて、ジャパデリが全く参加出来ない、という状況が何度も発生しました。もちろん、その大きな原因の一つは英語力不足から来るものだと思います。私自身、アメデリの発言を頭で和訳している間に、次の話が進んでしまって話についていけなくなった事が何回もありました。ただ、私は、原因は英語力不足だけではなかったように思います。それ以上に、日米の議論方法や価値観の違いが大きく関わっているように感じました。

まず、日本とアメリカでは、討論の仕方が大きく異なります。アメリカ人はとにかく、よく発言します。議論が白熱して来ると、手を挙げるのも忘れて我先にと自分の意見やアイデアを主張します。相手の話が途中で、どんどん発言します。それに対して、日本人はとても静かです。意見を求められて初めて、ゆっくりと発言し始めます。相手の話が終わる前に次の人が話し始める事は、ほぼありません。また、発言するスピードも全く違います。アメリカ人は、考えることと話すことが同時進行で行われます。そのため、話している間に意見や主張が変わることも少なくありません。それに対して、日本人は考えてから話します。そして、自分の中でアイデアが確定するまでは発言することを控えます。さらに、ファイナルプロジェクトを決める上で何を重視するかも違っていました。アメデリは、早くプロジェクトを決めて行動し始めたい、という人が多くいました。それに対してジャパデリは、多少時間がかかってもプロジェクトで何をするかをしっかりと熟考したいという人が多かったように感じました。最初、議論がなかなか進まなかったのは、お互いこのような違いがあるということ、を、認識していなかったからだだと思います。

私がアメデリとディスカッションをしていく中で一番大切だと感じたのは、自分を理解してもらう努力をする事です。やはり、自分の事を一番理解しているのは自分自身です。同じ日本人でも他人の気持ちを理解することは、とても難しい事です。まして

や、相手が育った環境や価値観の全く異なるアメリカ人の場合、やはり、ある程度自分から気持ちを伝える努力は必要だと感じました。また、英語力はもちろんあるに越した事はありませんが、それ以上に身に付けなければならないことがたくさんあることも実感しました。コミュニケーションは一般的に、言葉、話し方、ボディランゲージの三つの要素から成り立っていて、言葉の要素は全体の一割にも満たないと言われています。今まで、英語力ばかりに気を取られていましたが、どう伝えるかということも、工夫していく必要があると感じました。

この1ヵ月を通して、アメデリと共に議論し、答えを一緒に導き出していく過程は、私にとって、とても有意義な経験でした。もちろん、後悔もたくさんあります。ファシリテーターに挑戦しなかった事、相手の意見にすぐ流されてしまった事、あまり事前学習をしなかった事、他にもいくつかあります。でも、後悔は多少残るくらいの方がいいと思います。もしも100%現状の自分に満足してしまったら、次に繋がらないからです。私は今、内閣府の世界青年の船というプログラムに参加しています。その活動の中で、JASCでは出来なかった事に少しずつ挑戦しています。具体的には、アシスタントリーダーをやったり、自主活動を企画したり、などです。小さいことかもしれませんが、もしJASCに参加していなかったら、どちらの活動にも参加していなかったように思います。JASCは、私に一歩踏み出す勇気をくれました。挑戦する楽しさを教えてくれました。これからも、JASCでの経験が“Life Changing Experience”だったと胸を張って言えるように、自分のペースで成長し続けて行きたいです。

篠原由香里

この報告書を手に行っている人は大きく2種類に分かれると思う。1つはJASCを知り尽くしている人たち。そしてもう1つはJASCに興味を持ってくれた人たち。そんな後者の方々に聞きたい。この一連の参加者感想のページ、どこか異様な空気を感じないだろうか。少なくとも私が選考前に報告書を読んだ時は、「ジャスカ」だの「ジャスクシンドローム」

第5章 参加者の声

だの集団意識が強い単語の羅列、そして何人かに一人の割合で必ず書いている「あの1ヵ月が何だったのか未だによく分からない」「うまく表現できない」「夢だったんじゃないだろうか」という類の文章のオンパレードを前に、期待がつのると同時にどこかカルト的なものを感じてさーっと引いたのを覚えている。

そりゃあ1ヵ月も一緒に暮らしたら少しは名残惜しくなるだろうけど、なにもそこまで思い出に固執しなくても…。まさか毎朝変な踊りとか歌とか儀式とか強制されるんじゃないだろうね…。もともと国際交流や団体活動が好きでちょくちょく関わってきた私は、いくらそこに属す人や活動内容が大好きでも、その集団そのものに必要以上の帰属意識を持つことには常に抵抗があった。だから4月に自宅のポストに合格通知書が入った封筒が届いてから皆に直接会うまでは、参加できることに喜びを感じながらも「私はあんなふうにとっぷり余韻に浸かることはまずありえないな」と勝手に決めつけていた。の。だった。が。

あれよあれよという間に本会議が過ぎ去った今、こうして前と同じように過去の報告書を読み返してみると、以前は理解できなかった文章に共感している自分に気づく。確かに私もジャスクシンドロームに悩まされたし、この数ヵ月を通じて感じた気持ちはなかなか言葉に落とせない。皆で日本海沿いのテトラポットをよじ登って見つめた夕空の美しさ、分科会メンバーと徹夜して作ったファイナルフォーラムのビデオが完成した瞬間のみんなの笑顔と歓声など、頭の中には鮮明に焼き付いている光景も感情も、他人には思い通りに伝えられないのだ。充実感と虚無感が同時に攻め込んでくるようなこのもどかしさ、今なら身にしみて分かる。そして一番不思議なのは手のひらを返したように結局こんなことを書いている自分の態度。目の前にある落とし穴を余裕で避けて通るはずがいつの間にか自分から足を踏み外してしまったような、そんな矛盾めいた感覚に驚きを隠せない。

だけどその理由はたぶんこれだ。それだけJASCが魅力的で衝撃的な場所だったから。多種多様なバ

ックグラウンドと考え方があって当然で、議論する時はとことん追求し、遊ぶ時は思いっきり弾ける食欲さあふれた空間。70人全員がそれぞれ本当に魅力に満ちあふれており、私はそんな環境に常に圧倒され感銘を受け続けていた。周りのJASCerから学んだ幅広い教養と柔軟な発想の重要性。今まで頭をかすめることもなかった哲学的な思考方法。効率のいい会議の作り方。ちょっと変わった人生観に恋愛観。語学と知識の壁はあったがどれも勉強になり、なによりそういった会話そのものが楽しくて一年分くらい笑った。

思えば私はこの数ヵ月間、ありとあらゆる刺激を与えられる一方だった。私は誰かに何かを返すことができたのだろうか。何もしていなくても常に何かを与えられる状態に甘えて、せっかくの恵まれた環境を前に自分の短所である慎重すぎる性格を押し出してしまった場面が何度かあったことが悔まれる。分科会やシンポジウムやリフレクションで、話す機会も土台も動機も全て揃ってあとは踏み出すだけ、という瞬間にたじろいで拳手せずに終わったり。自分とは対照的にどんどん前に出てスポットライトを浴びていくデリやECの積極的な姿はとてまかっこよくて、でもそう思った瞬間には時すでに遅しで。衝動や感情の赴くままに行動に移す勇氣と決断力も時には大いに必要だと感じた。会議中にある人が語ってくれた“Don't wait for the time to come because it will never come”というフレーズは日々私の中で重みを増し続ける。これはもちろん、あの1ヵ月限定のきらびやかな世界だけに通用することではなくて。きっと平凡な毎日の一瞬一瞬にもチャンスや発見への道が開かれており、がむしゃらに追いかけるだけの価値や理由は、ただそれだけで十分存在するのだろう。

そんなこんなで今まで過ごしてきた夏休みの中で間違いなく一番感情が凝縮されていた20歳の夏は、第59回日米学生会議の記憶であふれている。みんながくれた優しい言葉や手書きのJASCメールは、あの戻らない時間は、夜の砂漠を照らす一番星のように高く遠いところで輝き続け、振り返るたびにキラキラ光り、迷った時には道しるべとして導いてくれ

る気がする。70年前からいろんな化学反応をとげつつも変わることのない想いを引き継ぎ、消化し、次代に残していくこの素晴らしさを、日米両国の学生に一人でも多く感じてほしい。心からそう願う。

杉山亮太

いつまでも続くと思っていたこの会議が終わったことがいまでも信じられないでいる自分がある。もちろん会議自体は今後も続いていくし、友情が切れることもないだろう。自分にとって、日米学生会議は、学生生活のすべてになっていた為、突然もう終わりだよといわれても、それを受け入れられないでいた。感想文を書き渋っていたのは、そこで終わりなんだと改めて実感しなくてはいけないからだった。初めて16人の実行委員が結成されてから一年、本当に最高の仲間ができたと思う。会議初日、一年ぶりに再会し、抱擁を交わし、初めて第59回日米学生会議の参加者が全員揃った事を実感したとき、なんともいえない感動だった。そのとき、今までの苦労はすべて吹き飛んでしまった。「Everyday is the last day of JASC, make the best out of it.」という目標を掲げ、プログラムのひとつひとつ自分のできる最大限でこの機会を活用すべく努力した。東京、秋田、広島と会議が進むにつれて、その思いは強くなっていったが、京都に着くと思ってもよらないトラブルの連続に、プログラムに参加できなかったり、参加者と夜話したりできなかった事が非常に残念だった。とはいえ、一番力を注いだファイナルフォーラムが成功を収め、新実行委員も決まった。もう明日アメリカ側の参加者は帰ってしまうという最後の日の夜、アメリカ側実行委員の一人、アリッサと話したことを忘れられない。“Does friendship really last forever? If we don't meet, will our friendship just fade out?”という質問に答えられずにいたが、“It is up to us.”と行ってハグするしかなかった。日米学生会議の本当の価値は、会議参加者間の絆の深さにある。これを絶やさないと、これが自分にとってのこれからの目標である。It's you who can make the difference. 何かを変えたいとき、それは自分を変えることから始まるのだと思う。日米学生

会議は、「変える」ことができる人、すなわち自分を「変えられる」人が集まっているから面白い。この会議は、多くの人の数え切れない努力の塊であり、そのすべての人たちに感謝を込めながら、このような会議がこれからも続いていくよう祈っている。「ありがとう、そしてこれからもよろしく願います。」

高井竜輔

分科会、フォーラム、スペシャルトピック。本会議終了後三週間程を経た今でさえ、会議中の様々な光景が目の前に蘇ってくる。

1ヵ月間に及ぶ本会議の間、人種も国籍も異なる72名の若者が海を超えて集う。類いまれな知性でディスカッションをまとめてくれた彼、卓越したリーダーシップと運動能力で陸上のヒーローとなった彼女、プロ歌手顔負けの歌唱力で皆をうっとりさせたあの子に、独自の恋愛論を語らせたら右に出る者はいなかったアイツ……。様々な“特技”で会議に花を添える彼らの傍らで、実行委員でもないのに率先して荷物を運び、ゴミを集め、他の参加者の体調を気遣い、黙々とスライドの編集をしてくれた人たちがいた。言わば裏側から会議を支えてくれた多くの参加者の姿に、胸が熱くなった。

サンフランシスコ、昨年夏。心の底から会議を満喫し、この会議を作り上げてくれた実行委員と参加者に感謝がしたい。その一念だけで壇上に立ち、スピーチを行った僕に一年後の会議をどうしたいかなんて見通しは全くなかった。

会議の余韻も醒めやらぬまま始まった実行委員ミーティング。毎回山のような資料を作り、目を輝かせて会議の理念や展望を語る他の実行委員を前に、乗り切れない自分がいた。彼らが語る「相互理解」や「信頼醸成」という言葉が、実体のない、上滑りしたものに感じられた。1ヵ月先の見通しも無い中で日々振られる膨大な仕事に対応していくのに精一杯で、59回会議の理想を思い描く暇などどこにも無かった。

変化が訪れたのは、年が変わった三月も終わりの時期だった。選考作業も佳境に入り、28名の参加者

第5章 参加者の声

の内、数少ない残りの枠を何人かの候補者と争っている。そのとき初めて（或是一年間の活動を通じて最も激しく）、実行委員のエゴが表面化し、衝突した。ある者は分科会の都合を優先させ、ある者は会議全体のバランスを考えて候補者を推した。選考中ずっと感じてきた違和感がピークに達した僕は言った。

「集まった人たちが会議を作るんだろ？自分たちが作った基準に適合しない人間を弾くなんて、どうかしている」

この発言が奇貨となって、それまで黙っていた他の実行委員も次々に口を開いた。選考合宿中一番長くハードな議論が幕を開けた。仮借ない応酬の末に辿り着いたのは、個人的な利害や感情で参加者を推薦している実行委員は一人もいないという事実だった。

実行委員の誰もが、59回会議を最善のものにしたいと強く願っていた。しかしながら、何を以て最善とするか、その部分にズレがあった。参加者を選ぶまでの6ヵ月間、日本側実行委員八人を結びつけてきた会議の成功という理念。その理念の内に潜んでいた微かな不協和音が、参加者の最終決定という土壇場になって軋みを挙げ、噴出したのだった。

何を以て会議の成功とするのか、思うところを洗いざらいぶちまけ、共有する作業が続いた。涙を見せる者もいたこのプロセスを通じ、漸く全員の思いが反映された理念が形になったと感じられた。異なる絵筆と絵の具を持ちながらも、ひとつのキャンバスに向かって絵を描くようにして会議の全体像を得た僕らは、妥協でも譲歩でもなく、共に会議を作り上げる28人を選ぶことが出来た。そこから先は、簡単だった。分科会、財務、サイトコーディネーティング。会議の「成功」を目指し全身全霊で駆け抜けた。（進路への不安やプレッシャーへの弱さから、JASCへ100%切り替え打ち込むのが遅れたことは悔やんでも悔やみきれない）

日米学生会議とは何か。一年間の実行委員活動を通して何を得たかと問われれば、人であると答える。会議を作り上げるのは人であり、人に影響を与え、人を変え、人をつくるのは常に人である。確かに、

ひとりの力には限界がある。しかし、ひとりとは他のひとりを変えていける。

僕は信じる。人の力と、人が人を変えていく可能性を。これほどまでに単純でいて、だが普遍的で力強い事実自分に自分の目を開いてくれた日米学生会議にはいくら感謝しても足りない。

最後に、一年間を共に過ごし、悩み、笑い、ぶつかり合い、今となっては家族以上恋人未満のような第59回日米学生会議実行委員会のみんに改めてありがとうと言いたい。お調子者で、仕事が甘く、夢見がちでああだこうだ言ってるだけの男を厳しくも優しくも見守り続けてくれ、しっかりした仕事ぶりできちんとフォローしてくれた皆がいてこそその会議の成功だった。そして、そんな実行委員の面々をさらに大きな温かい目で見守ってくれた参加者のみんな！本当にありがとう。いい出会いと忘れられない思い出に満ちた一年だった。

この前、吉祥寺にいいお店を見つけたんだ。一年後のミーティングの続きは、そこでしようぜ。

高野恭平

私はこの日米学生会議で何を得たのだろうか。自分の所属する暴力と平和の分科会では参加者が泣き出すほどの直情的な議論ができた。これほどの熱い議論はなかなか経験できるものではない。また、寝てしまうのがもったいないと思わせるほどの魅力的な友人たちとの出会いもあった。こちらも日米学生会議から私に与えられたとても大切なものだ。

では、これで十分だったのか。これらは多くの方々のご協力、そして莫大な予算に値するだけのものなのか。本気で世界平和を目指し太平洋を渡った歴代の志に比べられるだけのものを、この会議の中で私は見つけられたのだろうか。そうした想いが私の肩に重くのしかかる。ときに素直にはしゃげなくなる。私の悪い癖だ。必要以上に責任を感じてしまう。今までの人生の中でも、そういった重みに負け、つぶされかけそうになったことも一度や二度ではない。しかし、重りはときに人を動かす原動力となりうる。地球の引力に縛られ地を這うことしか許され

なかった少年が、空に想いを馳せ、ついには飛行機を作りだしたように。

1934年、数人の強い意志から日米学生会議は始まった。私はその想いをしっかりと背に背負い込み、これからも一步一步前進していこうと思う。自由に飛びまわる鳥たちに憧れながら。

竹内菜緒

“毎日楽しいけど、何かが足りない。このまま大学生活を終わらせていいのか。”

—そんな自分の大学生生活に疑問を感じ始めていた時、ふと大学のメールボックスに入っていた1枚のチラシ（フライヤー）を手にとった。普段はそんなチラシなどそのまま捨てる事がほとんどなのだが、なぜかあの桜と星が散っている青いフライヤーは私の目に留まった。これが、後に私の大学生生活に刺激が強すぎるくらい最高の“スパイス”を与えるきっかけとなった。

桜が舞う春、日米学生会議の参加が決まった。受かると思っていなかったのが、最初は嬉しいよりも驚きの感情のほうが大きかった。激励会に参加した時、頭が良さそうな（実際にとても頭がきれいな人たちだ。）実行委員や参加者に初めて会って、自分とはとつもない会議に参加するんだ、と初めて気づかされた。日米学生会議に参加することは、それはとても名誉な事であり、そして素晴らしい経験（その日、“Life Changing Experience”という表現を10回以上聞いた。）になることは間違いないと、会議経験者は口をそろえた。その後の春合宿の際に、参加者と深い交流をしJASCの“すごさ”を確信したと同時に、正直不安を覚えたのも事実である。そろいもそろって優秀でキャラが濃い参加者の中、自分は果たして会議に貢献できるのか、そして本当にJASCに参加していいのだろうか？

本会議前の事前学習は、とても充実していたし、それによってJASCへのモチベーションもあがっていった。テレビ局や広告会社、カリフォルニア大学の教授との勉強会etc… 大学でメディア・コミュニケーションを勉強している私にとって、全てが魅力的なもので、案の定とても素晴らしい経験となった。

事前学習を重ねるごとに不安よりも“Exciting”な気持ち、前に進まなくてはいけない、という思いが高まっていった。しかし、いざ本会議が始まる直前になると、その“Exciting”な思いよりも、これから1ヵ月集団生活する事に対し、そして皆の議論についていけるか、などという不安で逃げ出したい気持ちが出てきた。

一人で持てないほどの大きなスーツケース（多分ジャパデリでは一番大きかったと思う。アメデリで一番のSamには負けたけど。笑）をもって、いざ本会議へ挑んだ。直前になって不安が再発した私だったが、いざ会議に参加してみると・・・結論から言うと、70人の仲間との1ヵ月は本当に素晴らしかった。素晴らしい、という言葉では抑えきれないほど。色々なことに驚かされ刺激され、知的好奇心が高まり充実していた毎日だった。JASCを通して、普段気づくことができなかった色々なことに気づかされた。いつもも行っている新宿もJASCerと行けば、そこには普段とはちがう空間が広がっていた。日本だけど、日本ではないようだった。人と出会える奇跡、そして出会った人とコミュニケーションできる幸せと素晴らしさを感じた。コミュニケーションとは、他者を理解し、かつ他者からも理解されようとする過程のことを指すが、JASC中その過程を感じることができた。たとえ価値観が違う相手がいたとして彼らの考えに賛同することができなくても、その「過程」を上手く共有することができれば、良いコミュニケーションを取れたと言えるだろう。人との出会いによって今まで気づかなかったものに気づかされる可能性が広がるのもコミュニケーションの魅力でもある。自分が、“意味”を見出していくのだから。私にとってJASCは考える「きっかけ」を与えてくれる場であった。

JASC中に辛かったこと・悔しかったことも沢山あった。その中でも一番印象的なのはRTでのことだ。私の所属していたRT内では、アメデリとの意見のずれ違いがあった。彼らのアイディアに納得がいかないのに、自分の意見をなかなか言い出せなく、そうしているうちに話し合いだけはどんどん進んで

いった。本当に辛かったし悔しかったし、自分が情けなかった。ある時、他のRTにいる友人に自分の思いを聞いてもらったところ、その思いを皆に伝えたら？と言われた。でもそうしたら、またRTの方向性を変えることになってしまう…。しかしこのまま終わらなくなかったので、空気を読めていないことは承知だったが、思い切って皆に自分の考え、メディアに対する思いを伝えた。RTディスカッションの流れを乱すような意見だったのに、RTの皆は私を受け入れてくれた。「今まで気づかなくてゴメンね。Naoの意見を言ってくれてありがとう」、とJessaに言われた時、涙がとまらなかった。その時、辛いことや悔しいことを克服できるのは自分しかないと感じたと同時に、JASCという素晴らしい環境におかれている幸せを感じた。

そして、楽しかったこと・・・ありすぎて何をどこから話していいかわからない。JASC中の楽しかったことを頭に描くと数々の場面ででてくる。新宿でガールズナイトを企画して皆をしゃぶしゃぶに連れて行ったこと。六本木のクラブで大勢のJASCerと踊り狂ったこと。Susannahと映像の素晴らしさやお互いが作った映像について話したこと。秋田のホームステイ先でMorganとお酒を飲みすぎて、おなかを抱えて笑ったこと。皆で輪になって折鶴を折ったこと。アルファベットで“JASC”とマヨネーズで書いた広島風お好み焼きを作ったこと。宮島で鹿にスカートを食べられそうになったこと。毎晩のように誰かと遅くまで語ったこと。姫路城でちょっとはしゃぎすぎちゃったこと。京都でTJがRTのメンバー全員の似顔絵を書いて皆で笑ったこと・・・他にも多くのシーンが鮮明に頭に浮かぶ。

そして何よりも、JASCは私にとって「挑戦」の場でもあった。これがLife Changing Experienceかどうかは、現段階ではわからない。だけどJASCは私にとってLife “Challenging” Experienceであり、自分自身を見つめる素晴らしい機会となった。RTはもちろん、一つ一つのフォーラムで刺激を受けた。そして何よりも70人の仲間と本音で話せたことが良かった。

JASC中に感じた感情を一つ一つ挙げていくとき

りがないので、この辺でストップにしようと思う。ここで書いたことは、ほんの一部である。最初に言ったように、全てを文章にあらわすことができないし、JASCを形容するのは非常に難しい。表現にも限界があるようだ。ただ一つ素直な気持ちを言葉で表すとしたら、こんなにもJASCから得るものが大きいとは思わなかった。半年前は全く知らなかった70人の素晴らしい仲間との絆。JASCは、そこらへんにあるサークルとは全然違う、私が求めていた以上のものだった。

幸運にも、私は第60回の実行委員を務めさせていただくことになり、来年も本会議に参加することになった。まずは私が1年前見たような素晴らしいフライヤー、ポスター等を作って1人でも多くの人にこの素晴らしいJASCを知ってもらいたい。そして、ただ「楽しい」だけの会議でなく、一人ひとりの参加者に、そして社会に「意味」がある会議を作るべく、この1年JASCに精一杯力を注ぎたい。“笑顔”で第60回を最高の会議にすること、ここに誓う。

Thank you very much.

武田尚樹

JASCに応募したのは、自分をもっと良く知りたいたいという思いからである。日本で生まれ、生後6ヶ月から12歳までアメリカに住み、アメリカ人だと思って育った自分。そして、日本へ帰国して、アメリカ人ではないことがわかった自分。日本では7年間自分のアイデンティティーを探しながら過ごしてきたある時、日米学生会議のチラシが目に入った。日本とアメリカ。自分が探していたものがここで見つけられるかも知れない！そう思い応募した。目的を達成できたかどうかはわからないけど、想像していた以上のものをJASCは与えてくれた。

春合宿、“A life changing experience”って聞いたとき正直、“whatever, what can a month do to someone’s life?”って思った。Well...it did a lot. JASCを通して自分は社会のために何ができたかは定かじゃないけど、人生で初めて、社会のために働

きたいと思った。今まではアメフトとかで自分のため、チームのために努力したことはあったけど、社会のために努力しようと思えるようになったのはJASCのおかげだと思う。そしてわずかではあるかもしれないけど、自分にも何か貢献できるものがあるのではないかと教えてくれた。

何よりJASCは楽しかった。みんなで笑ったり、泣いたり、自分の人生の中であんなに充実した1カ月はいままでなかったと思う。そして、大変勝手ながらその1カ月で強く印象に残っている思い出を書き並べさせて頂きたい。

The following are my best JASC memories :

毎晩389での“会議”はさすがに秋田に行くころには体が持たなかった。進司とりょうちゃんは本当にすごいと思った。

世界銀行フォーラムのテレビ電話でのスピーチは楽しかった。えり、Hiro、マシュー、場違いなスピーチをしちゃって申し訳ない。

RT Dinnerでお菊が鶴の恩返しをAmedeleに熱心に説明してて、「こいつやる！」って思った。

居酒屋でぼたくりにあいそうになって出て行って(とっきーありがとう!)、そのあとコンビニでお菓子を買いまくってみんなで食べたあのアクシデント。

Alissaとお互いのアイデンティティーについて話して、答えが見つかったわけじゃないけど、多くの人が同じような悩みを抱えていることがわかった。

スキットは両側とも爆笑で特にあのMoのParis Hiltonのimpressionは最高だった。“I didn't know sake had alcohol”笑。その日Boと俺とお互いプレゼント忘れてgift交換のふりしてたなあ〜。

Capture the Flagで転びながらセーブしたのは正直恥ずかしかった。その後足攣ってもっと恥ずかしい思いしたし。

お台場でえり、Bo、Mo、Lindseyとのプリクラは最高だった! たぶん人生のなかでのベストプリクラショットだったと思う。

横須賀米軍基地でKelly少佐と真剣に安全保障に

ついて話し合えたことは貴重な経験だった。俺みたいな無知な学生に耳を傾けてくれたことを本当に感謝しています。

高井くんのJASC LOVEについてHost Familyと話したのは今考えると爆笑! CaseyとHost Fatherの宗教と戦争の関係についての意見の違いとかもおもしろかったし。TJも含めてみんなで食べたHost Motherの美味しい家庭料理は忘れない。ありがとうございました。

白神山地は想像以上の美しさだった。そしてガイドさんのギャグの“T”は大変だった。特にブナッコーリーのギャグは本当にどうしようかと思った。

Special TopicsでのKendallの友達がRonaldを盗んだ話は爆笑だった。あとKendallの秋田での“Hooooo!!!!”と“What about?”も。

俺と進司とジフで夜、Couple探しに行って、結局見つけたのが酔ったマシューとひろりゅうというなんとも言えない落ち。

俺とJazzで竿燈祭りを真ん中で見てたときラッキーなことに竿燈が倒れてきてそれを持つことができた。Jazzに“Take! You saved my life!”って言われて、大げさだけど、初めて人の命を救ったかも笑。宮島はめっちゃくちゃ楽しかった。小川でゆうきに手で押し合うやつで負けたのは悔しかったけど・・・。ズボン濡れちゃったし。広島風お好み焼きもおいしかった!

広島を学生を交えて平和について真剣に考え、語り合うことは自分にとって一生に一度の経験で、学ぶことがたくさんあった。逆に自分はなにを与えられたかと思うと悲しくなる。

Ayaと先頭をきってホテルに帰るときに、毎回間違った方向に曲がって、BoとMarquitaに注意され、二人で方向音痴であることを再認識した。そのあとNancyとキャシーの部屋でSchlachetが登場したときの涙がでるほどの爆笑。

清水寺で真田さんに仏教について教えてもらって初めて自分の宗教について考えることができた。そのあとハツ橋を試食しまくって、晩御飯が中華の食べ放題で後悔しまくったのを覚えている。

キヌセミとNazi Campの関係性についてBradと

第5章 参加者の声

の話、Hidemi達とのEC話での異常な盛り上がり、なおの古い情報の提供、キヌセミではcurfewがあった分みんなと楽しい会話ができた。

ファイナルフォーラムが終わったときの達成感は何ともいえない。唯一の後悔がもっと日本側の意見を反映させたかったってこと（マリー、お菊、詩乃、亜紀ごめん）。

そして8月20日・・・お別れのときの涙。さよならを言うのは慣れてはいるけど一度にあれだけの人数にお別れを言うのはさすがに耐えられなかった。バスが行ってしまったあとHidemiとおもいっきり泣いて、来年のJASCの成功を誓った。あのあと表情一つ変えないれいに二人とも慰められたことは今考えると恥ずかしい・・・。

最後に、こんなすばらしい機会を与えてくれた59回の参加者、特に実行委員に心から感謝したい。この1ヵ月は本当に楽しかった。一生の仲間、そして一生忘れられない思い出ができたと思う。みんなありがとう。

土岐吉史

日米学生会議を振り返ると「後悔」と「可能性」と2つの言葉が思い浮かびます。

英語の壁、アメリカ人学生との目まぐるしく意見の飛び交う、早い展開のディスカッション。日本語であれば考えを伝えることができるが、英語の壁を必要以上に考えるため緊張と不安に自分の意見が押しつぶされ、一歩踏み込んで発言することができませんでした。今振り返ると、英語の文法や単語のミスなど気にせず、発言をすればよかったと感ずることがあります。完璧な英語を話すよりも、自分独自のアイデアを発言し、自分の考えを参加学生と共有することが重要です。考えを共有することで新たな考えが生まれるため、ディスカッションの意味も増すこととなります。そこに気づかず、黙っていた自分に「後悔」の念を感じます。

しかし同時に、「可能性」を感じることもできました。同じ学生がアジアユースフォーラムで英語スピーチをし、秋田フォーラムでは英語によるパネル

ディスカッションに参加をしている姿を目の当たりにしました。メディア分科会のディスカッションにおいても英語の細かい間違いは気にせず、まず自分の考えを伝えようとする熱い姿を目にしました。また、学生会議全体を運営する実行委員の姿にも刺激を受けました。会議の計画、予算、広報、リクルーティング等、すべてにおいて学生である実行委員が舵をとり、会議を進めていきます。特に印象に残っているのは、関西での広報活動に協力した時の実行委員の姿です。重圧感をもった企業の役職につかれています方を相手に、会社からの協力や協賛金をいただくために学生会議を強くアピールし、失敗し断られることがあっても、下を向かず積極的に行動する姿が目に残っています。同じ学生がここまでできるなら、学生の自分も自分独自の考えさえあれば、失敗を恐れることなく自分の意見を発言し、自分を信じてもっと積極的に行動することができるのではないかと「可能性」を強く感じました。

日米学生会議に参加し、もっと発言や行動をすればよかったと「後悔」を感じると同時に、積極的に堂々と発言、活動する仲間の姿を見て、自分もやればできるのではないかと「可能性」を強く感じました。来年の4月から、私は企業で働きます。同じ「後悔」を繰り返さないため、自分が感じた「可能性」を強く信じて何事に対しても積極的に取り組み、自分自身を成長させていきたいと思ひます。

平井麻祐子

56回の報告書に顔を突っ込んで、読んでいた、、、大学生になるのが待ちきれなかった、あの時から3年、私の夢は叶った。

JASCとは一体何だったのだろうか。

本当のところ、未だにJASCというものの存在が自分の中で大きすぎ、消化し切れていないのだと思う。その証拠に未だ周りの人にJASCを説明する際、上手く説明できずにいる。お土産話も、断片的でファンタジー小説のハイライトの部分だけを切って貼り付けたようなものだ。

ただいま言えることは、先輩方の言葉を借りるなら、「自分が、自分でいられる場所」であった。

普段の大学生活でも、今までの人生の中でもこれ程、個の尊重と尊敬が自然に守られている空間に出会ったことがなかった。当たり前だと思っていたその環境から離れた今、71人の個性あふれる人々が共鳴していた環境が懐かしくてたまらない。もうJASCが終わってしまった事実を思い出すまでに朝起床後に時間がかかるほどだ。

しかし、ただ自分が自分でいられるという言葉の意味は、現状に甘んじるということではない。Fellow JASCers 1人ひとりに尊敬すべき点が多々あり、私にとってのrole modelであった。そんな70人が周りに四六時中いるというのは、自分の限界をひしひしと感じなくてはならないということである。自分に何が出来るのか、改善点は何か、今どうしてそう考えるのか、毎日の1分1秒が私にとっての成長の機会であった。あの言い回し、気配り、リーダーシップ、ヒューマニティー、、、今も私の目標である。

会議の終盤、私は周りのJASCerたちに、こんなことを言っていたと思う。「大学生活がこのままJASCであればいいのに。」

大概のJASCerは「このまま続いたら体力が続かないよ！JASCに殺されちゃうよ！」などと笑いながら言い、持てるエネルギーをすべてつぎ込んできた自分たちの会議の終わりを少しでも思い出すまいとしていた。しかし不意に口からでたその言葉に私は自分のJASCに対する気持ちを一番表していたと思う。毎日が実りのある学習であったJASC、それ以上の学習はないと思ったから口から出た言葉だ。今まで知らなかった学術的分野への学習意欲も湧いた。また、人は宝である。議論は心から楽しめるものである。衝突は避けられない、避けてはいけな、など人生における教訓も経験から学んだ。単純に考えてみれば、全くバックグラウンドも、考えも異なる71人が集まり、議論し、共同生活をしている環境は滅多にあるものではない！

まだJASCの全貌を、私のJASCの経験を書ききっ

ていないように思うのはなぜか。それは本当にJASCから得られるもの大部分、「経験」として語れるものというのは、そして学生である私たちが成果を生み出したといえるのは、これから先の選択が重要であるのだらうと私は思っているからだ。このJASC確かに私の人生の中でゆるぎない地位を占めているが始まりに過ぎないのだ。この経験を顧み、語り、学びを実践することによって、これからの人生の局面でどれだけJASCの経験が生かされてくるか、今以上の意味を持つもの出来るかが決まるのだ。

あれだけ悩んだJASCの意味も、自分自身の貢献の仕方も、59回のこの報告書を読みながら考えよう！

よかった、私のJASCは、夢は、まだ終わっていない！！

廣瀬裕子

2006年8月末。第59回日米学生会議の準備を開始した。

私にとっては、日本語でのミーティング、全く異なる性格の仲間、「日本人」として日本のあらゆる側面を紹介し、アメリカ側参加者の滞在をなるべくストレスなものにしなければと自分にプレッシャーをかけ、かなり緊張していた。

実行委員という経験は、58回会議では完全には向き合っていなかった仲間と向き合う機会を与えてくれた。好みも仕事の進め方も性格も育った環境も全く違う8人のJEC。この8人でどんなチームとしてやっていけるか、何度も考えたことはあったが、共通に持っているものは58回会議の思い出と、共に会議に参加した仲間を大切に思う心。そして、59回を史上最高の会議にするという目標だった。これが59回の準備に力一杯取り組む根本にあったのではないかと思う。同じ想いをAECも共有していることをメールやオンラインミーティング、そして特に本会議で確信した。毎週のミーティングや日々のメール交換を重ねるごとに、正直に自分の考えを伝えられ

第5章 参加者の声

る心の底から信頼する仲間となっていた。

自分とは全く異なる人と共に同じ目標に向かう機会を与えてもらったことに心から感謝している。それぞれの違い、長所と短所が融合する。私たちの場合はでこぼこのパズルのように融合して、素晴らしいチームが生み出された。最初はぎこちなかったり、フラストレーションがたまっていたりしたミーティングも、最終サイトではミーティングを行わなくてもスムーズに運営が出来る程、チームとして団結していたように思う。それぞれがベストを尽くし、刺激し合い、励まし合い、支え合った。16人いなければ、この会議は成り立たなかった。71人いなければこの会議は成り立たなかった。

広島サイト、予算、財務活動、メディアへのアプローチ、アメリカ側とのリエゾン、色々なことにチャレンジさせてもらい、一つ一つから学んだ事は計りしれない。しかし、全体として学んだ事は、JASCを通じて築いてきたものは、「絆」であるということ。この絆は参加者の間だけでなく、後援団体の方々、アルumnaiの方々、様々な企業の方々、それぞれのサイトで協力していただいた方々、JASCの活動を通じて関係を築いて来た全ての人々と結んできたものである。仕事として何かに取り組むのではなく、「絆」を意識して、一人の人間と向き合うことを意識しながら人と接することで、仕事は仕事でなくなり、新しい可能性が生まれる。

一つでもこの絆が結ばれていなければ、今回のような形で第59回会議を実現することは可能ではなかった。一人ひとりに深く感謝を申し上げ、これから先、私自身も色々な絆を築いていく事で、私からも何か与えられるよう、力を尽くしたいと思う。

一人の人の笑顔に心が救われたり、
一人の人の言葉が考えるきっかけを与えてくれたり、
一人の人の努力に心を打たれ、頑張ろうと思ったり、
一人ひとりがお互いに与える影響は大きい。
一人の力には限界もあるが、可能性もある。

それぞれが自分の周りの環境を設計し、絆を通して形作る力を持っている。

留学中のパークレーの町を歩いていて、ふと本屋さんの前で立ち止まる。
「あ、この本、アダムが好きそうだな・・・読んでみよう。」

あの人が興味のあることがもっと知りたくて、もしくは考え方の理由が分からなくて、もっと話がしたくて、それが×70人以上となり、自分のアンテナが自然と広がっていく。そんな風にJASCで出会った方々、そして参加者一人ひとりのimprintは確実に私の中に残っている。

今一人ひとりと感じている絆と信頼を、お互いを受け入れる感覚を忘れずに、心を開き、ステレオタイプを乗り越え、人を信じる力をこれからも養っていききたい。

廣田隆介

JASCが終わって早三週間・・・未だに夢にはJASCerがごろごろ出てくるし、朝起きればみんなのいびきが聞こえてくる気がしてならない。これ程ひどいJASCシンドロームに襲われているのは自分だけかと思っていたら、他のデリのFacebookやmixiの日記を読んで、あながちそうでは無さそうだと気付いて、ホッとしたりもする。そんな奴らの日記やWallにコメントを残せば、「時差なんか関係ないぜ」って勢いで返信が返ってきて、それを見て一人ニヤニヤする自分。学校や他のコミュニティーの友達となんか全然連絡を取らずに、JASCワールドにしがみつきたがってる自分を見て、「このままじゃヤバイ！早く日常に戻らなきゃ！」なんて危機感に襲われたりもする今日この頃。報告書作成の責任者になったくせに、JASCを文章化することで本当に59回が終わってしまう気がして、寂しくて、なかなかこの全体感想をまとめられない自分。いくらどうあがいてみても、この4ヵ月間を紙にまとめることはできなさそう。行く先々で聞かれる「日米学

生会議って何？」という質問は、もはや愚問に聞こえてしまっただけではない程だし。それと同時に、この素晴らしい経験をJASC外の人々に上手く伝えられない自分が、もどかしくて堪らない。

こんな状態で文章を書くのは申し訳ないけれど、書いている内に何か見えるものがあるかもしれないから、この場を借りて自分なりにJASCを振り返らせてもらいたいと思います。

日米学生会議、通称JASC。大学一年次からその存在は知っていた。大学二年次には、第58回に参加し数段に輝きを増して帰ってきた友人を見て、とても悔しい思いをしたことを今でも覚えている。そして大学三年次の2007年夏、二年越しの夢が叶って、ついにJASCに参加することができた。このような背景から、自分は周りのジャパデリと比べて、かなりの熱狂的JASC信者であったに違い無い。そしてそれは、大学入学以後ずっと物足りなさを感じていた自分自身を、JASCが一気に変革してくれるのではないかという期待感の表れでもあった。

その大いなる期待を、JASCは決して裏切りはしなかった。普段は集団行動が苦手な自分が、ここまでJASCにコミットすることができた最初のキッカケは、やはり春合宿において尊敬できる多くの仲間に出会えたことが挙げられるだろう。全員がアカデミックな議論を難なくこなす事は勿論のこと、筋肉自慢、コメディアン、音楽家、哲学者、旅人、冷静沈着な人、人情味厚い人・・・JASCは本当に様々なタレントを持った人達の集まりで、その強い個性に最初は圧倒され、自らが埋没してしまう不安にさらされたことを覚えている。そして普通ならそれらの個性は衝突し合い、結果として無秩序状態になってしまう所が、JASCにはそれらが上手く調和した、とても居心地の良い空間があった。やはりそこには、JASCerに共通する突出した能力、つまり「人を受け入れる能力」の存在があったと感じている。この素晴らしい能力を発見した瞬間、自分の中で何かが変わった。

そして、いよいよ第59回日米学生会議本会議が始まった。異国の地からやってきた、新たな36もの強

烈な個性。しかし、不思議と打ち解けるのにはそれ程時間はかからなかった。朝から晩まで毎日のように寝食を共にし、アツいディスカッションを重ね、時にはぶつかり合いながらも、次第に互いのことを理解し合っていた。いや、理解し合ったというよりも、お互いを「日本人」や「アメリカ人」として捉えるのではなく、「一個人」として、そして「友人」として理解する土台ができたと言った方が正しいかもしれない。そして一度「友達」になれば、後は野となれ山となれ。そこには国籍や人種、言語の壁を越えた相互理解と信頼の輪が、確かに存在した。

このような本会議の印象を裏付ける証拠は、山というほどある。時差ボケと寝不足に耐えながら世銀フォーラムを乗り切り、蒸し暑い新橋のガード下で共にラーメンをすすった時のあの一体感。代々木公園でアメリカ版ドロケイのようなゲームに燃え、Tシャツが搾れる程の汗を共にかいたこと。アジアユースフォーラムにおける達成感。その後クラブで全員が踊り狂い、拳句の果てに終電を追って東京の夜の地下を走り回ったこと。居酒屋での公開恋愛談議・・・東京だけでもまだまだあり、もはや記憶のピースごとに書き出していたら、決められたA4四枚なんてスペースはすぐに使い切ってしまうそうだ。それ位あの夏の記憶は濃く、鮮やかに自分の脳裏に焼きついていることにも気付かされた。このような鮮やかな記憶のワンピースを形作ってくれた全ての人に、ありがとうと言いたい。

ここまでまとまりのない徒然とした文章を書いたけど、書いてみてとりあえず分かったことは、やっぱりJASCについて文章化するなんて、現時点ではまだ不可能だったことだ。もちろんこれらの記憶は美化されている可能性は否めないし、まだまだ解釈の余地があるだろう。JASCについて自分の言葉で説明するには、相当長い時間が必要そうだ。しかし幸運にも自分は、もう一度このJASCに参加するチャンスを得ることができたらいい。そして今自分は、過去の参加者がどれ程このJASCを愛しているかを知っている。この責任は、極めて重い。そんなJASCを愛する全てのデリ達の思いを胸に、JASC

第5章 参加者の声

のバトンを次の世代に繋いでいくプロセスを、他の15人の仲間と共にしっかりと作り上げて行きたいと思う。

古屋佑樹

日米学生会議にはいろいろな動機、希望をもって臨んだ。

それらが達成されたかどうかはわからない。

充実していたと思う、また思いたい自分がある。しかし一方で、しっかりと「形」としてつかめたもの、得たものが何かあるのかと問われると一瞬エアポケットに落ちたような気分にならないこともない。

感想をつづりながら、自身が得たものを振り返ってみたい。

そもそもは英語でディスカッションをする。それによって自身の英語能力を鍛えることができる。こういう（浅薄な）理由で興味を持った。

分科会、スペシャルピック、各フォーラム…さまざまな機会を通じて英語でディスカッションをする機会はあった。その中で自分の意見を発信することができたと思う瞬間はあった。これには満足を感じている。しかし一方で他の人が発言している内容が分からない瞬間が訪れ、そこから「分からないスパイラル」に陥ってしまったことがあるのも事実。自身の英語能力を情けなく思い、また分からないときに分からないと表明することができない自分自身にも腹が立つこともあった。

しかし悪いことばかりでもなかった。広島フォーラムでディスカッションをリードしたときはグループの議論をどう進めるのか他のリーダーとじっくり話し合うことができた。その際にお互いの考えで共通すること、相違することが洗い出され、刺激され、興味深い体験だった。またディスカッション自体もうまく運び、達成感があった。

一方で世銀でのディスカッションコーディネーターはうまくいかなかった。どう進めるのかということのを他のリーダーと話し合うことができなかったこと

が主原因であったが、悔やまれる。

次に人との出会い。

特別な意味での出会いは「鹿」としかなかったが（笑）、広い意味での出会いはたくさんあった。これもやはり会議が始まる以前から求めていたものであった。

バックグラウンド（国籍、環境、大学、宗教、食生活etc）が異なり、「違い」を知ることができた。

例えば、大学。日本は授業を適当につめ、適当に通い、適当に単位を取得し社会へと進む。しかし話をした人の大学では授業は少ししか取らないが、それにかかる時間や気持ちの違いを知った、こういう大学生活もあるのだなども。

あるいは例えば一緒に出かけることがあると僕や僕の友人などは多少不快なことがあっても、あるいはあまり求めていなくても拒否したり、不平を言うことはない。しかしある人は思いのままに表情、態度、言動に出していた。僕自身、不快に感じるのかなと思っていたが、この人はそういうものなのかと思うと、意外とそんなに不快な気持ちにならないことを学ぶことができた。少しこれには驚いた。

一人ひとりの顔を思い出すと限りないエピソードが綴られそうなので、これについてはここで筆を止める。

相互理解について。

上記のように違いがあることは分かっていた。だからそこをお互い理解しあうことが必要な面もあるだろうし、ぜひしたいと思っていた。

おそらくこれは達成された、というかより正確に言うと既に達成される環境ができていた。というのはアメリカから来る学生も理解しようという姿勢であり、特に利害が対立することもない。このような条件下でお互いを理解し合えないということがあろうか。できないとしたらそれは「子供」だと主観的に感じる。

しかしその中で、理解はしあえても歩み寄ることができない面はあったことは否定できない。

例えば世銀での環境で、温室効果ガスを排出する

ことはよくない、削減しなければならないという発言に対して、経済成長の観点から削減することはできないとする意見、あるいは温室効果自体存在しないという意見が乱立した。お互いに理解を示すことはできてもそこには「Yes, but...」の世界が待っていた。交渉とは違うので歩み寄る必要性はないとは言えるが、理解の先には歩み寄りができてもよいのかなと感じた。

飲み会。
楽しかった。

スポーツ。
楽しかった。同じ人間だなと思えた。

ダンス。
楽しかった。同じ人間とは思えなかった。

日米学生会議。
楽しかった。本当に楽しかった。

何を得られたのか、何が足りなかったのか、また振り返る必要はあるけどこれだけは確かなことだと断言できる。

参加してよかった。

この機会を作ってくれた実行委員のみんな、協力、援助してくださった方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。

堀沙織

どんな人にも学ぶべきところがある。向かい合っ
て話をすると、その人にしかないものが見えておもしろい。ふいに出る言葉や行動も、他でもないその人から出てくるもの。考え方や選択のしかたも、習慣なり経験のつみかさねから導かれたものであったりするのだ。本当にさまざま。

たくさんの人と出会っても、その中に、自身の理

解者であったり理想的な人物像を追い求めて、探し回っているだけでは自分はあまり変わらない。

自分と異なる価値体系に生きているように見えて親近感が持てない人、一瞥して通り過ぎてしまいそうな人にこそ、何か学べることはないかと、丁寧に向き合ってみるの方が、自分の視野を広げてくれるように思う。

そして、人から素直に学びとるためには、やわらかい感性をもち、できるかぎり自分自身が相対化できていなければならない。心に余裕をもっていなければいけない。そして、人から学びながら自分もまた澄まされていく。

自分を知らないために、「人」から学べず、自分の価値観を「人」に投影してありがたがったり非難したりだけでは、もったいない。やはり、自分自身の基準とする人間像から人を測りがちで、安易な人物評は、自身の価値観が色濃く出たものにとどまることも多い。自分を知ることなしに、人を知ろうとしても、見えないものが多い。

人と出会い学ぶと、自分の気持ちや考えのバリエーションもゆたかになる。人のいろんなリズムにふれて、それに呼応することで感覚もゆたかになる。そして、何らかの形で感化されて、自分に変化がある。しかも、人間ってそれぞれにおもしろくて感動的！と思わせてくれる。

これからそれぞれに変わっていくだろう70人の仲間に、この先もずっと学んでいきたい。

本郷亜紀

「第59回日米学生会議」それは、予想外、いや予想以上の出来事ばかりだった。間違いはない。京都は私の普段の生活の場である。それにもかかわらず、JASCerと共に過ごした京都はいつもとはまったく違う非日常だった。何がちがうのか。なぜちがうのか。理由は単純で、そこにJASCerがいたからである。真剣に考え、真摯に受け止め、投げ出さずに理解しようとするJASCer一人ひとりの姿勢や71色の個性が、何か不思議な何か特別な空気を醸し出していた。

第5章 参加者の声

「一生懸命」遊ぶときも学ぶときも休むときも、常に真剣に取り組む。

私は、自分の中に何らかの大きな変化が起こることを期待して応募した。しかし、JASCで何を得意か抽象的なことばかりでどこか掴めない。それでもこの機会を最大限に実りあるものにしようと、自分に課したルールである。

直前合宿に向かう前、私は、JASCに参加するために書いた小論文をもう一度読み直した。自分は、何をこの1ヵ月で学びとることができるのか。一番意識していたことだが、一番不明確なことでもあった。英語でのディスカッション、1ヵ月の集団生活、相互理解…予想できることをいろいろ書いていたがどれもこれもまだぴんとこない。

しかし、東京で日本側参加者のみんなと再会した瞬間、それは、最初から決めてしまうことではないし、掴めるものでもないと思った。本当に様々なバックグラウンド、才能をもつ人々に会い、話し、そして感じる。会議中はアンテナを高く持って、それに終始していいのではないか。そうする価値があるのではないか。そう信じられるほどに、魅力的で、心底「すごい」人がたくさんいた。JASCは人材の宝庫だった。

そして、第59回日米学生会議が終わった直後の今、JASCとは何だったのかと振り返る。参加の合格通知が届いてから、事前活動も含めて約4ヵ月、JASCにとっての自分、自分にとってのJASCというようなことは結局、常に頭の隅にあった。JASCは私の人生の転換期とはならないかもしれない。しかし、自分とは異質なものに触れることで、自分自身の長所や短所を再確認し、時には今まで気づかなかった自分を発見した。例えば、議論の中で気づいたことがある。ここにいる参加者は、一つものを学んだとき、それを吸収し自分の中で構造化するに終わらず、消化して、自分らしさという濃い味付けをしてアウトプットしているということである。そこにこそ、議論を面白くする素がある。私が自分に物足りなさ、不甲斐なさを感じている原因であることに気づかされた。私はこれまで、特に大学に入ってか

らは、自分の学びと、将来の職業とはどう関係があるのか、どう結びつけるのか、どうすれば一貫性のある学びを通すことができるのかと、合理的な考えばかりが浮かんでいた。学びの先にある職業を意識しすぎていた。これが悪いことだとは思わないが、しかし、それではつまらない。どんなことも、必ずどこかで繋がりがあり、学べば自分に面白さを加えてくれる。フィルターを通して覗いていた世界が急に明るくなった思いだった。

JASCに参加した後で、自分の何が変わったのか、今でもそれはわからない。しかし、自分のこれからの何かを変える原動力を得た。それぞれのJASCerがそれぞれの分野でがんばっている。そんなJASCerを見ては、知的好奇心と活動心が駆り立てられる。今の自分をじっくり見つめ直すことができ、人生を開拓していく上で、その選択肢を確実に増やせる視野を得、道は違うが共に前進する仲間を得て、変化という成長の第一歩を踏み出すことができた。これこそが、JASCでの学びの結果である。

応募前、私にとってのJASCは、自分への挑戦だった。

そして会議が終わった今、私にとってのJASCは、JASCerである。

“JASCer”この言葉は私にとって誇りでもあり、重い言葉でもある。JASCerになれたから、こんなにすばらしい仲間に出会えた。防衛大・米軍基地の見学や、日本人の私が、日本人の家庭にホームステイすること、様々な国の学生とテレビ会議やパネルディスカッションを行うこと、著名な方々とお話できたこと等、貴重な体験はJASCerとして経験したからこそ、より素晴らしかったのだろう。また、時には、将来の夢や社会について思っていることを赤裸々に語り合った。まだまだ青い私たちが大きな話を真剣にした。JASCerだからこそたった1ヵ月の間にできたのだと思う。

本会議終了後も、偶然で道でJASCの仲間を見かけると、寸分の躊躇いもなく自然と笑顔で声をかける。そしてまた、毎日会っていた会議中のようにす

ぐに語り合い始めることができる。ほんの数ヵ月前まではまったく知らない人だったことが信じられないくらい、太い人間関係、信頼関係が今ここにある。アメデリお見送りの日の朝、流した大粒の涙がその友情を物語っていた。この夏得た一番の宝である。すぐには会えなくても、どこかでみんなが活躍していると思うと、また、JASC中の1ヵ月を振り返ると、まるで水を得た魚のように、私の中の好奇心とやる気が駆り立てられる。そんな心の支えとなっている。

みんな、ずっとずっと一生よろしくお願いします。

これからJASCerの一員として、ここで得た経験を今後の自分に、そして近い未来にどう貢献することができるのか。内輪で思い出話に花を咲かすだけに終わらず、72人一人ひとりが考えていかなければならないことだろう。自己完結では終わらせない。会議が終わった今、私はたくさんの自分への課題を持って帰ることとなった。新たな挑戦、さらなる努力が必要となる。しかし、仲間という原動力を得た私は、何とか乗り越えられるという希望でいっぱいである。

59回日米学生会議に参加できて本当によかった。これからの新しい時を最大限に輝かせることができる糧としていきたい。

後援の方々、実行委員のみんな、本当にありがとうございました。

間嶋絵梨

JASCで思い知ったこと。

それはinputとoutputの重要性。「人間は考える葦である」という言葉があるがまさにその通り。私の人生の中で、こんなに毎日、色々考え続けたことはなかった。なんで、なぜ、どうして？米国人の父と日本人の母を持ち、父は東京に来た時、靖国神社に絶対足を踏み入れようとしなかったわ、と言ったあなた。なぜあなたは貴重な観光日に靖国神社に行こうと思ったの？浴衣を着てはしゃぐ私の心に物悲しさを宿らせた秋田・竿燈祭りの火。死者の送り火であるこの火に日本古来の趣深さを感じるんだ、と伝

えたけど、この気持ち君にちゃんと伝わった？したり落ちる汗を拭いながら見た広島。日中は川が輝き、緑あふれる公園を夜は光が原爆ドームを照らし出す、そんな町を歩きながら、原爆投下の日に思いをはせる。一体なにが起こったの？なぜ原爆が？京都であったtalent show。みんながpop songやdanceを披露する中、君が歌った「イムジン川」。君はどんな気持ちで、なんでその歌を選んだの？星空の下で君がぼつり、ぼつりと話すのを聞いた仁和寺の夜。あの日君はなにを思った？そして私は何を思ったのだろうか。

こんなに五感が研ぎ澄まされる経験はきっとなかなか出来ないと今、心から思う。とにかく人を、物を、出来事を、理解しようと考えることを考え続けた。そして、この考えるという手段を手助けしてくれるのが、日ごろの経験、感性、教養・知性であったりするのだと思う。JASCは日常から切り離された所にあるとは思わない。日常生活の積み重ねの上に、この夏のJASCの経験があり、今がある。確かに、JASCは限られた人が参加出来る集団である以上、JASCの経験全てを実生活に応用できるか、と言われればNoである。ただ、JASCの経験を生かす場所は、今私たちがいる、この場所、なのである。59thJASC楽しかったよね、こんなことがあったよね、とJASCer同士で話すのも良いけれど、この経験を将来どう生かしていきたいか、を話すことはもっと大切だろう。そう、心に秘めて自己完結するのではなく、outputすること。私は自己完結ほど怖いものはないと思った。私が思うに考えるという行為そのものが自分のフィルターを通すということ、つまりどうしてもbiaseがかかる。それが自分の意見を持つ、という事だと思うが、自分の意見を人に伝え感化を受け自分自身を進化させる、相手の意見に納得出来ないなら、ここは私はこう思うと伝えて議論を深める、それこそ自分を伝え、相手を理解しようとする、自分をそして相手を思いやる行為なのではないか。私は、JASCに参加する前はinputは好きでもoutputは好きではなかった。不必要な衝突を生むくらいなら、別に言わなくてもいいや、私はこう

第5章 参加者の声

思うんだし、と勝手に自分を納得させていた。でもそれは自分の成長を止めるに等しい行為だったに違いない。JASC中にそれに気づきoutputを心がけようとしたが、どの場面でも皆に等しくoutputが出来たか、と問われれば首を横に振らざるを得ない。まだまだ、私の言葉、知識に確固としたものがないといやというほど実感したし、自分の未熟さを思い知った。言葉、文字、態度は私自身を表す鏡だ。教養・知識というものはすぐに身につくものではない。だからこそ私は本を読み、人と出会い、さまざまな意見を聞き、考え伝え続けたいと思う。

感謝を。

実家は四国、大学は金沢と地方で生活する私がJASCに少しでも関われば、と思い広島でのsmall discussionのfacilitatorに立候補したのは、人前に出るのが苦手だった私にとってちょっとした変化だったように思う。広島について自分なりに勉強をしてtopicをあげ、discussionに臨んだが、しっかりとした意見をもつJASCerのdiscussionのfacilitateを2時間半出来るのだろうか、と不安で仕方なかった。意外にも当日は思った以上に時間が早くたち、もっとdiscussionしたかったな、というのが感想だ。皆の意見は学ぶことも考えることも多かった。そしてなにより、様々な意見を聞くのが楽しかった。きっと、enjoy出来たのも拙いfacilitatorの私を陰ながら皆がサポートしてくれたからだと思う。ありがとう。

両親に。生まれも育ちも日本。見渡せば田んぼ。そんな私がどうにかJASCでもやってこれたのは両親のおかげだと思う。英語という手段を身につける重要性を教えてくれたから。(まだまだ道半ばだが。)今、2人の言っていることがよくわかる。まず、勉強したいことをみつけなさい、それを深めるためにいつか必ず英語が役立つ日が来るはず。私は医学を勉強するのが好きだ。いくら勉強しても飽きないし、1つ知ると人に不思議さ美しさを感じる。帰省する度に私が痩せていくのを嘆き、同年代の子が可愛い格好をしているのを見ては、一緒に買い物に行

こうと誘う母。ここはこうなるんだ、と説明しつつ今は勉強でも何でも絵梨がしたい事が出来る時期だよと説く父。まだまだ分からない事だらけの学んでいる最中の毎日が楽しい。今、私があるのは2人のお陰。ありがとう。

JASCに関わる全ての方に。2007年59th日米学生会議を通して私がbig summerを経験出来たのは今回の開催に向けてご尽力して下さった皆様あってこそだと心から思います。いつかこの夏得た経験や今学んでいる事が少しでもpublic welfareのために還元出来るようこれからも歩んでいこうと思います。ありがとうございました。

そして一夏をとともに過ごした59thJASCerへ。京都で解散後、一人反対方向の新幹線に乗る時、これからは誰もいない中、全て自分でなくてはならないと一気に現実に引き戻された気がした。皆こそがJASCを通じて私が得た一番の宝物。色々ありがとう。そしてこれからも一生よろしくお願ひします！

松田浩道

あの圧倒的な夏が過ぎ、自分の中で整理しようにもしきれなかった数週間がすぎた今、ようやくJASCの1ヵ月がほんやりと心の中に形を結びつつある。日米学生会議を振り返ること、それは実行委員であった自分にとってはこの一年間を丸ごと振り返ることだ。第58回会議でのアメリカでの経験から、長い準備期間を挟んでの瞬間の1ヵ月。正直なところ、完全に満足の行く参加ができたかといえばそんなことはない。本会議中、運営面にミスがないように常に気が張りつめていた分、中身である会議中の議論になかなか集中して参加できなかったという思いや、自分の分科会や担当だった広島の企画で「ああすればよかった」という思いはどうしても残る。いまさら気づいても自分にとっての日米学生会議は既に終了し、もうやり直すことはできないという冷酷な事実の前に、会議終了直後は取り返しのつかない後悔の念に襲われたりもした。

しかし、いくつかの悔しい経験を含めて、JASC

の一年間は心地よい思い出になりつつある—それはおそらくは時間の経過による美化だけではなく、力不足なりにも精一杯情熱を傾けたことを素直に肯定できるからであろう。

第58回会議でのアメリカでの経験は、自分にとって、とてもこれで終了させてしまえるものではなかった。素晴らしいチャンスを自分の力不足で活かしきれなかったという思い、また、他人の作ってくれたものにただ乗っかっているだけだったという思いが残り、まだ日米学生会議でやるべきことを全然成し遂げられていないと感じた。とにかく挑戦してみようと思い立って実行委員に立候補し、サンフランシスコで59th JASCが始動した。

実行委員としての一年間はあっという間だった。深夜遅くまでパソコンに向かい書類を作ったり、大量の応募者一人ひとりにメールを送り続けたりといった作業が懐かしく思い出される。慣れないながら全国の大学に片端から電話をかけポスターを送ったり、説明会や講演会を企画したりといった広報活動。広報を終え、責任者として取り組んだ選考は相当大的なプロジェクトで、一通りやり終えたときには一緒に動いた実行委員のことを今までよりずっとよく理解できるようになっていた。激励会、5月の春合宿で実際にデリゲートを迎えることができた時から、ますますやる気が上昇した。一生にもう二度とないせつかくの機会だから、という思いで事前活動には極力参加するように心がけ、いろいろな分科会の事前活動に顔を出しては多方面の議論を楽しんだ。日米学生会議側の責任者として準備した防衛大訪問も、有意義な企画に仕上がったと思う。担当の広島サイトやナショナリズム分科会の準備はパートナーの実行委員と熟考と議論を重ねてできる限りの準備をし、本会議を迎えた。

本会議中は、とにかく滞りなく会議が動くように気をまわし、いつも気が気ではなかった。直前合宿の時点で部屋割りのミスだとかバスの遅れだとか様々な不測の事態の対応に追われて大慌てだったし、ある程度会議が軌道に乗った後でも、70人もの

大きな団体を動かすにあたって、実行委員ならではの独特の気の張りつめ方があった。特に自分の担当の広島に入ってから、バスの遅れが予想以上であることから急いで夕食の場所を変更して到着場所を調整してもらったり、講演者の直前のキャンセルの連絡を受けてすぐに対応を判断したりといった場面でその場の機転が試された。迷う人を出さずに大人数での移動をきちんと予定通り誘導するという仕事も、先頭を歩きながら常に緊張したものだ。サイト運営は大勢の親切な方々のサポートと綿密な準備のかがあって、まずまずスムーズにいったのではないかと思う。広島でのシンポジウムを終えた日の夜に、ほっとしながらアメリカ側の広島担当の実行委員と散歩して広島の平和について交わした会話が懐かしい。

その反面、正直なところ分科会では力を出し切れなかった思いが残っている。実行委員に選ばれた時から分科会運営の方法については様々に思いをめぐらせ、自分なりに下調べをして来たり、日本側の事前活動で様々な活動ができたことは非常によかったが、それらの準備を本会議においてうまく活かし切ることができずに自分の力不足を実感することとなった。サイト運営の負担から、分科会のリードについてはアメリカ側のパートナーに極力任せてしまおうとした甘えもあったように思う。できることならば、去年からぜひとも達成したいと思っていたような深い議論をもっと思う存分繰り広げ、自分自身ももっと積極的に発言できるような参加の仕方をしてみたかった。毎回十分に準備をして臨み、議論の中身に全力で集中する余裕も、その場で高度な話題に対して意義のある発言を英語で繰り広げるような力も十分になく、やや残念な思いが残った。

とはいえ、会議が終了した今になっても、アメリカ側分科会メンバーとはメールのやり取りを通じて議論の続きができています。毎回相当な長さの文章を送り合って真剣な議論を繰り広げていると、本会議中に話しきれなかったことも、十分議論の続きはできる、挽回のチャンスはあると多少安心できる。本会議中の分科会の議論に不満だった参加者には申し訳ないが、日米学生会議は議論を始めるきっかけに

第5章 参加者の声

すぎなかったのだと理解しておこう。

さて、第59回日米学生会議は自分にとってどのような会議だったのだろうか？日米学生会議を経験することで自分はどのように変化したのだろうか？一年前に比べて、度胸はついた。一年前は、一人で企業に乗り込んで交渉ができるようになるとは思っていなかった。さらに、大量の仕事を限られた時間でこなす作業を一年間続けて来て、一度に多くのものごとを抱えてもつぶれずに平然とやり遂げる力も身に付いただろう。英語の力も、去年に比べたらこれでもましになった。

しかし、そのような外面的、技術的な面を超えて、数々の尊敬する人に出会い、人生を変えるような刺激を受けたことが何よりも大きい。世界の問題を自分のこととして感じ取り、一生懸命取り組む参加者や実行委員に出会い、議論する中で大きな刺激を受け、エンパワーされ続けた。開発や平和構築の分野で将来一緒に仕事をしたいと心から思えるような人に出会い、影響を受けた。それだけではない。自分を除いた実行委員の15人をはじめ、参加者のみんなに出会えたこと、サイトコーディネートの過程で、同年代や高校生の学生さんを含め多くの広島の人々に出会えたこと、これらの貴重な経験は自分自身に取ってはかり知れない重要性を持つ。

一夏をともに過ごした素敵な仲間は、皆すでにそれぞれの道へと進んでいる。早速外国へ留学し新たな生活を始めている人も、次の学生活動に精を出している人も、大学や資格試験の勉強に本腰を入れ始めた人も、第60回日米学生会議の実行委員として活動を始めた人も、様々だ。全ての参加者にとって、この夏の経験が何かしら今後の人生の糧となっていくことを心から願っている。リユニオンが、今から楽しみでならない。

改めて、多数の支援者の皆様にお礼を申し上げると同時に、参加者のみんな、実行委員のみんなに「ありがとう！」と言いたい。最後に、昨年作ったJASC SONGを歌って実行委員の役目に一区切りをつけることにしよう。

—いつでも 振り向けばすぐそばにある
あたたかな思い出を心に抱き
これからも一歩ずつ歩いてゆこう
変わらない友情を胸に誓い—
JASC Forever!

間橋大地

「日米学生会議？・・・へえ、もう59回になるんだ。」

初めて日米学生会議（JASC）を知ったのは、大学のHPに掲載されていたことからだった。そのころ、大学の授業・サークル、別府での活動に限界を感じていたときだった。何をやるにしてもAPUという、ある意味で外の世界と隔絶された「非現実世界」で満足している周囲の人間に、嫌気を感じていた。そんな時に出会ったJASC。自分のこれまでの大学生活の力試しにしてみようと考え、参加することになった。

春合宿後から7月、ひたすら開発RTの勉強ばかりしていた気がする。気が付けばRTのことを考え、気が付けば開発の本を読み、気が付けば開発RTの合宿に参加していた・・・春合宿で出会った仲間、彼らとは本当に熱中できる仲間だと直感した。だからこそ、これほどまでに熱く、没頭できた。大学に入ってから初めてのものであった。

いよいよ本番・・・しかし、大学の試験期間と重なり、直前合宿に参加できないどころか、なんとアメデリよりも遅く（つまり東京に一番最後に）到着したデリになってしまった。今考えてみれば、直前合宿に参加できなかったことは、後々に大きく影響していたのだろう・・・

アメリカからの新たな36人の仲間との出会い。さらに、レセプション、訪問、観光とハードな日程の東京サイト。前から分かっていたことだが、英語で進行されるJASCに、少々ストレスを感じてくる。アメデリとは英語で話せるが、会話の共通ネタが少ないため長続きしない。しっかり予習を繰り返して

きたが、それでもRTのディスカッションについていくので精一杯。追い討ちをかけるように蓄積される疲労・・・なかなかJASCの流れにのれない日々が続いていた。

転機は秋田であった。生まれて初めて訪れる町で、東京と同じくらいの暑さに戸惑ったが、それでもホストファミリーの日沼さん一家の温かいもてなしで、2泊3日を穏やかに過ごすことができた。この時になって、初めてJASCと真っ向からぶつかってみようと決心した。

「なんか、不思議な感じだ・・・」

広島に到着し、初めて原爆ドームを見て、平和記念公園を歩いた。夜でライトアップされていたこともあったのだろう。国技館、東大寺、これまでに何度か初めて訪れる場所に“圧倒される”ことがあった。しかし、これほどまでに心が揺さぶられる、強烈な“何か”を訴えかけるような場所は初めてだった。やはり、広島は“ただ”の街ではないと直感した。

そして、京都。この頃になるとアメデリとも自然と会話ができるようになった。アメデリの中にも、簡単な日本語を覚えてくれる学生もいた。会話が弾む。心から楽しめるようになった。

今、終わって振り返ると、後悔ばかりが脳裏に浮かぶ。しかし、後悔があって満足していないからこそ、次につながると信じている。

「次は何をしようかな・・・」

卒業まで、あと1年半。新たな挑戦が始まる。

三窪英里

2007年7月26日、午後18時半。オリンピックセンター。私たちが待っていたかのように夏本番の暑さを迎えたその日、米国側参加者36人を乗せた成田からのバスを待った。

直前合宿、第1サイトと東京での10日間の滞在を担当していた私は、経験したことのないような興奮と使命感を全身に覚えていた。

バスの遅延。とっさのスケジュール変更、早速求

められた的確な判断力と対応。

正直なところ、これから始まろうとする1ヵ月が「魔物」のように思えた。恐怖という意味ではない、ただ目の前に見えないとてつもなく大きなものが立ちほだかっている感覚だった。そして自分の役割を果たすことへの責任を重く感じていた。

思えば、理念を設定して、それを形に落としていく作業の繰り返しだった委員会活動。

しかしこのバスが到着した瞬間からすべてが実体となっていく。この全く想像のできぬ1ヵ月は何をもたらし、73年の歴史にどのような軌跡を刻むのか。そして、自分ができることは？ただただ、見えなかった。

しかしバスが無事に到着し、米国側実行委員8人と再会、日米の実行委員16人がはじめてひとつになった瞬間、

「できる」と思えた。

魔物という言葉は脳裏からすっかり姿を消した。

そうだ、私には同じテーマ目標に向かって1年間苦楽を共にした頼もしい仲間がいる。

こうして2007年夏、私の人生最大の挑戦は始まっていった。

しかし、7月26日のこの瞬間を迎えるまでの道のりは想像以上に長く険しかった。

「第59回日米学生会議テーマ“Advocating Japan-America Participation in Global Change”太平洋から世界へ〜グローバルパートナーシップの探究と次代の創造〜」

このテーマの下、私たち実行委員は1年間走り続けてきた。

What is Advocating?

自問自答は1年間続いた。

日米学生会議ができるAdvocateとはなにか？

社会に対して発信できることとは何か？

自分には何ができるのか？

広報、選考、財務活動、サイトコーディネー

第5章 参加者の声

ト・・・

仕事は毎日波のように次々と押し寄せてきた。

What is Advocating?

苦悩や迷いもあった。

力の限界を感じ、テーマに対して会議に対して懐疑的にならざるをえないときもあった。

私たちが会議に求めるものは何か、それをどのように具体化して実現させていくのか。

「自分たちの頭で考えて行動しているはずなのに、なんでリミットを感じたりするのだろう。いい会議を作るためにもっともっとできることがあるよね。」思いを形にすることの厳しさにいつも奮闘していた。

What is Advocating?

でも私が一緒に働いてきた仲間は情熱にあふれていた、いつも本気だった。みんな、睡眠より何よりJASCの成功のために必死だった。

What is Advocating?

暗中模索の中、時には仲間と本音での衝突を繰り返しながらも、こうやってテーマに向かって取り組む「姿勢」が心から好きだと思えた。

いつの日からか、全員の中にECs as a “TEAM” for 59th JASC としての自信と結束が芽生え始めた。

そして本会議が東京を皮切りに始まった。

What is Advocating?

いってしまえば空想上の計画にすぎなかったこと全てが、実体となって動き出す。そこには生身のJASCerの声があり、笑いも涙もあった。実行委員としての1ヵ月は現実となっていく会議を俯瞰するような特別な立場にあり、会議の中身をとにかくひとつひとつ丁寧にこなしていく感覚だった。しかし、私は実行委員であると同時に会議の参加者でもあり、昨年よりもっと心震える場面に遭遇したい、参加者全員をよりよく知りたい、という焦りにも似た思いに駆られていた。

What is Advocating?

そして第59回会議を振り返った今、思う存分議論したし、最高に楽しんだ気がする。

秋田でみた竿燈祭りのちょうちんの色も、広島平和記念資料館の前で自身のアメリカ人アイデンティテ

ィーに憤りを覚え狼狽していたあの子と話したことも、人生・仕事・結婚について夜を徹して話したあの日のことも・・・全ての時間が「第59回JASCの思い出箱」いっぱいにつめられた。

What is Advocating?

しかし、それでもこの1ヵ月間は瞬く間に過ぎ、まだまだ話したかったことは山ほどある。また、実行委員として活動した1年は実に多くの出来事があり、成功もあれば学ぶべき失敗も多く容易に総括できるものではない。それでは、学業や就職活動との両立に奮闘しながら、奔走した1年間、そしてこの1ヵ月間は何だったのだろうか？何を残し、何を達成することができたのか？

What is Advocating?

この問いへの解答は困難を極める。それは自己反省と自己評価に依拠せざるをえないということ以上に、正確にはこの解答が現在導き出せるものではない性質を持つということに気づかされているからなのかもしれない。おそらく全てを知ることや、行動することには1ヵ月という時間はあまりに短く、テーマにしてきたadvocateとはこれから一生かけて続けるものであることを、1ヵ月といえども非常に濃密な時間を過ごしたからこそ感じているのではないかと思う。

ただ、今1つだけ確信をもっていえる答えがある。それは、私はこの夏JASCからとてつもなく大きな「ギフト」をもらったということだ。会議を終えた今、1年間の結果が全て結びついた「第59回JASCの思い出箱」が、一生携えていける特別な「ギフト」に変わっていることに気づく。その「ギフト」は、私の価値観や人生におけるプライオリティーを自分でも戸惑うほどに根本から変えた。将来の軸がトゥーンとできたような、そんな気がする。そして、その「ギフト」の中身をはちきれんばかりにつめてくれたのは、よりよい社会を作るためにどのように働きかけようか、自分は何をもって世界に貢献しようか、そんなことをいつも真剣に悩み考えている70人の仲間たちだった。

“Spread love everywhere you go, Let no one ever come to you without leaving better or happier” —

—Mother Theresa

そんな仲間たちはこの大好きな言葉の意味を真に教えてくれるような、互いを認め合える素晴らしい人々だった。自分とは大きくかけ離れた極端な意見を聞くこともあるし、生き方の違いからわかりあえないこともある。しかし、全てを受け入れてきちんと反応を示してくれる、自分らしくいられる環境をつくってくれる思いやりの心にいつもありがたい気持ちでいっぱいだった。

最後に、このギフトにきゅっと固く結ばれたリボン、それは一緒に苦勞し、達成した日米の実行委員間の絆である。そしてそのリボンの片隅にはfaith—信頼の文字。会議の最後にある実行委員の仲間からうけとった手紙にはこうあった。

“僕らはみんな、エリに対して信頼がある。そのことをいつも忘れないで”と。

すーっと胸の中で張り詰めていたものが解かれ、熱いものがこみ上げると同時に、全てが報われる思いがした。そして、私がもらった一生大事にしたいこの「信頼」の二文字は、他の実行委員に対して私も同じように抱いていることである。1年間共に働き、いつも励ましをくれた素晴らしい実行委員のみんなへ感謝の気持ちでいっぱいだ。

さあ、明日から手にしっかりとこのギフトを携えて踏み出そう。

望月進司

JASCに参加して、僕は何を得たのか？だとか、どう今後の人生に影響が出るのだろうか？だとか正直、そんなの全然分からない、てのが本当に正直な気持ちなわけであって、勉強したかと言われると難しいところだし、昔どこかの漫画でみつけたことばで、「ジェットコースターに乗っているときに『ああ、もう後何分で終わっちゃう、あのカーブを過ぎたら終わっちゃう』なんて考えていたら何も面白くない」ていうのがすごい印象的で（多分、というか絶対、細かいところは違っているはずだけど）、僕はJASC中そんなことばを何度か思い出した。だか

ら、ああ、まあJASCの間にJASCの意義だとかJASCで何をしようだとか考えたりはせずに—意識して—何も意識しないよう、何も考えないでただ楽しもう、終わったらきつと、色々解るよ、そう思っていたんだけど、まあ本当は時々意識しちゃっていたんだけど、

あはは、結局今も何もわかっちゃいないんだな。でも、

JASCでは本当に色々なカッコいい人、素敵な人に会えて、いやあこの人には敵わないや、あ、でもこの人あの人にも敵わない、ああ、俺なんてまだまだだな、頑張らなきゃって、強く思ったし、この人とその人あの人と友達になりたい、もっともっと、遊んで話して一緒にいたいと思ったりした。それだけで十分だろう？そうも思えるんだ。というのも僕は常々、僕の人生で一番大事なものは他の人であって、それは家族であったり友人であったりすると思っていて、そういう意味では僕はJASCで僕にとって一番大事なものを得たのかもしれない。そして、新しい友達ができたという意味では、僕の今後の人生にとって一番嬉しい変化があったのかもしれない、そう思うわけなんだ。

後、話は変わっちゃうんだけど、JASCで会った人たちは、友達であると同時に僕にとってすごいでっかいライバルであるという気がしているんだ。JASCの雰囲気さがそうさせるのか僕らがそういう年頃なのかとかは知らないけどJASCでは将来の夢だとか目標だとか照れちゃうような話を色々暴露しあう機会が色々あったわけで僕は色々な場面ですぐいでっかい話をして、今となってはもう後には引けない、ていう気持ちが結構強くなってしまっているんだ。他の皆はでっかい夢に向かって着実に努力をして進んでいたりして、口ばっかで何もしていない僕はこうしちゃられない、やばいやばいという気持ちが少しずつだけ湧いてきているんだ。やっぱ僕って人間はセルフエスチームってやつを必要としている人間だから、俺って格好良いって思え

第5章 参加者の声

ないと何もやっていけないから、何かその根拠となるような、でっかい格好良いことをしないとイケないという気が本当にしているんだ。そういう意味でもJASCは僕にとっていい刺激となったのかもしれない。

何だか支離滅裂でわけのわからない文章になってきたけどもう一度話を変えると、とりあえずJASCが終わる直前に僕は心からこいつのためなら体を張りたい、と感じた瞬間があって、理性なんてそっちなので文字通り体が動いちゃった瞬間があった。ちなみにECに立候補したことなんだけど。冷静にクールに後になって考えたらとことん馬鹿な話なんだけど、学生の間での思い出としてはそういう青臭い気持ち悪い経験も嬉しいものだよな？今となっては落選して心底ほっとしているんだけどね。

というのは半分くらい嘘で本当はすごい寂しいからほっとしたっていうのも負け惜しみと自己防衛なのかもしれないんだけどね。あははわけがわからないよね。でも、一つわかったのは、普段普通していると自分がどういう人間なのかとか自分は何が好きで何を大事に思っているだとかなんてなかなかよく分からないことが多いと思うんだけど、このときばかりは「あ、俺ってこういう人間か。こういうものを大事にしている人間なんだな」というのがわかった気がするんだ。要するに自分についてもよくわかった、ということ。僕がJASCで一番学んだことは自分自身なのかもしれない、ということなんだ。

わけがわからなくなった文章をどう締めくくってということ程やっかいなことも少ないよね。でもまあ無理やり頑張ってみるとすると（今思いついたんだけど）JASCで何を学んだとかどうライフチェンジングだったとかがよく分からないのはジェットコースターがまだ走り切っていないからなのかもしれないな。

全くオリジナリティを感じない話で恥ずかしいけ

どとりあえずこれで終わります。最後にJASCに関わる全ての方々、お疲れ様でした！そして本当にありがとうございました。第59回日米学生会議は楽しかったです。

安田雅治

そこに広がっていたのは、悲惨な現実だった。

うなだれるもの、嘔吐を続けるもの、熱か、自分の症状にうなされパニック状態にあるものもいる。自力では歩けなく屈強なアメデリに運ばれるものもいた。あるものは、脱水症状を起こして切迫した危険な状態にあった。

それは最終サイト京都に着いた瞬間だった。笑顔のものは誰もいない。バスの運転手も含めて。救急車が宿舎を往復し、不安が71人、JASC関係者を覆った。健康なデリゲーツでさえも疲れに埋没し、もちろん実行委員はそれ以上に右往左往していた。

会議が十分に終わりがねない事態であった。

会議終了までに、10人前後が病院に運ばれた。そこにとどまらず、感染症の疑いが、食中毒の疑いがあるということで、保健所の調査が入った。

そのことがかえってさらに不安を煽ったかもしれない。保健所も、所見で食中毒などと断定がしにくかったようで、意外に緊張した様子はあまり見られなかった。慣れもあるかもしれない。あとは、最初に通報した病院のある管轄の保健所から、宿舎の地域のある保健所へと案件が移ったこともあったかもしれない。というのも、初めに通報を受けた保健所の方とそこからの依頼を受けて調査をした別の保健所の方とは、だいぶ緊迫感というか雰囲気違ったからだ。そこに少し驚きも感じた。

ウイルス感染して消化器に症状をおこしているものがいた。中の一人からノロウイルスが見つかったということで、保健所から消毒についての指導があった。医者の診断結果は人それぞれやはり、ちがうものであったようだ。感冒の者もいれば、日射病に近いもの、消化器には特に問題なく鼻と喉に症状があるもの、熱のあるもの。ストレス、疲労、過労、睡眠不足が主な原因と推察されたものたちもいた。

しばらくあって、保健所の結果が出た。摂食行動調査（つまり、JASCerがそれまでに立ち寄ったすべての飲食店へのヒアリング）、症状の出たものへの検診等の結果だった。結果は「原因不明」。感染源も、ノロウイルスの集団感染があったのかも、なぜあれだけのJASCerが症状をみせたのかも、すべて不明だということだった。

会議に平静がもどったのはいつのことだっただろうか。

起こる事は起きてしまった。そこでどのような対処ができたのだろうか。取り返しのつかないことが起きなかったという点では、危機管理は成功したと言ってよいと考える。他方、危機を起こしてしまったプロセス、危機回避の仕方には、多くの反省すべき点があったように思われる。体調がすぐれない参加者たちのケア、デリの疲労度を見た上での会議の柔軟かつ適切なマネージメント、関係先との調整など。

原因は以下のものが考えられる。しかし専門家からも確固たる意見がない以上、これも推測の域は出ないものである。

1. 気候

要するに暑さである。一番症状を訴えるものが多くなったのは8月13日。その日の中の姫路城見学が一番デリの体力を奪ったようである。ちなみにこの日は、広島を朝に出発し、兵庫県西部で科学施設見学、そうめんがメインの神戸日米協会レセプション、姫路城見学、そして夕方に京都の宿舎になる立命館大学に到着、自由時間という予定だった。

その前後の広島も京都も、もともと夏は酷く暑い気候で有名であるのだが、それに加えて、記録的な猛暑が続いた2007年に59回会議はぶつかってしまった。水分を補給する、直射日光は避ける、つらくなったら涼しい場所で休憩を取るなど、暑さの管理が徹底できなかった。

ちなみに補足すると、ここに関しては、当日のプログラムの責任者が自分であっただけに、医者が言うには、それが一番の要因ではないだろうというこ

とではあったが、私自身はずっと心苦しく思っていた。

2. 疲労

今年のJASCは暑かった、それだけで十分に疲労はたまる。それにJASCは集団生活であるし、日常ではない緊張の場面も続く。疲労の原因は多くある。夜、宿舎外へ遊びに出て、遅くに帰ってくるものも多かった。それに関わらずとも慢性的に睡眠不足のものが多かった。第3サイトの終わりには疲労もピークに来ていたのだろう。

3. ストレス

JASC本会議は何かとストレスがたまることが多い。ストレス管理の連続。ある意味だれにとっても、自分のストレス、自分自身を正面から見つめざるをえない試練の1ヵ月と言える。だからこそJASCは、他では味わえない大きな実りを与えてくれるものであると思う。話はそれだが、ストレスほど人を病に巻き込むことはない。大きな壁の前に、個人のストレスマネジメントに限界があったのだろう、そしてデリのストレス状況を踏まえた上での柔軟な会議運営も不完全であったことも、結果からみれば否定できないだろう。

4. 衛生管理

食べる前には手を洗う、食器はいつも清潔にしておく、口に入れるものは必ずきれいにしておく。基本的なことが徹底されていなかった。自分が上記の件について一番携わったECであたったので特に記しておきたかった。

ところで、私は、国際交流の目的とは一言でいえば「相互理解と平和の醸成」であると思う。言い換えれば、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米にある、よって学生もその一翼を担うべきである。」ご存知JASCの創立以来のテーマである。

お互いを理解しあい、信頼で結ばれあい、それが時を越えて続いていく。これが国境を越えた誤解、偏見を少なくし、平和に貢献していく。もうこれは

第5章 参加者の声

実践に特化した平和教育かもしれない。

友人になれば、その友人に起きること、友人の故郷で起きたことは自分の問題になる。何かをせずにはいられなくなる。それがたとえパレスチナの紛争であっても、温暖化による海面上昇で難民化するナウルであっても、飢えの続くサブサハラであっても。ひょっとしたら、交流事業は、グローバルイシューを解決できる大きな手段かもしれない。理想的に書きすぎたかもしれない。理論は間違いない。

補足すると上記の体調不良のアクシデントなどは理論だけではいかないいい反例だろう。いくら金銭と労力を投入しても、健康問題で会議が壊れていけば、悪い思いしか残らず、相互理解は後退していたかもしれない。学生だけで運営するという理想と、学生による運営の限界という現実。ということも忘れてはいけない点である。

立ち戻って、JASCが素晴らしいと思えることは、JASCは危機をも相互理解に変えうるという点だ。すなわち、

ずっと親友でいられそうだと思うこと。

これこそが本当の価値だと思う。JASCのプログラムで、アカデミックな討論、文化交流は大きな柱であり、セールスポイントである。よく言われていることではあるが、国際交流の本質はむしろプログラムの外にある。飲みに行ったりぐうたれたり、翌朝辛いと分かりつつも、夜な夜な時を忘れて語り合ったり、芝生の上で、クラブで、ビーチで、気が狂わんばかりに騒いだり、、しとしとレストランで語ったり。実は一番効果的な信頼醸成の場なのだ。

カップルを探しに茂みに向かう探検隊な男ばかりの3人組を秋田で見かけた。自分も昨年は夜な夜な、うまくいかない恋愛について語り合った大事な仲間がいる。未だによくわからないおかしい絆がそこにある（報告書が出来上がるころには、そこから卒業していることを切に望む）。

健康危機の例をはじめに取り上げた理由は、その事例を通じて、一緒に困難に立ち向かった仲間、時には助け、そして助けられ、助け合った仲間と自分

との人間関係が一気に深まったから、その貴重な機会だったからである。

“太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～”

これは、59回会議のテーマである。これをよこしまに解釈したジョークもすこし流行った。“Tangible”なカップルが6組できた（8月18日現在、安田調べ）。昨年では考えられないこと。冗談だけで言っているのではなく、とても貴重ですばらしいことである。繰り返しになるが、1ヵ月一緒にいただけなのに、70人と他にない親友にずっとい続けるような気持ちにさせてくれる。そうなる可能性が実際に高くある。

この事実。ほかではないものだと自信がある。

何年か後に、何十年か後に、59の仲間と一緒にこの報告書を読みたい。

山本詩乃

2年前の立命館大学滋賀キャンパス一。

それが私とJASCの初めての出会いだった。

ひょっこだったわたしは日米学生会議の一般公開環境フォーラムに見学に行った。

そこでJASCerのパワーに圧倒され、涙が出るほど自分の無力さに打ちのめされた私は、絶対に2年後あの会議に出る、と心に誓った。この会議こそ自分の弱い部分、改善すべきところを仲間と切磋琢磨しながら伸ばすことができる場だと感じた。

当時留学が決まっていた私にとって、それは十分すぎるほどの動機付け、まさにLife Changingな刺激になったのだった。

こんな長年の思いを抱いて参加したJASC。

最初は気合十分で迎えた。でも、春合宿で皆の高い能力と意識を目の当たりにして、大きな不安に襲われた。

春合宿でのOBの方の“エリートとしての使命を持ち、人から学ぶだけでなく自分で何かを発信できるようにするべし”

というありがたいお言葉も、それをばねに成長する余裕がなくて、会議が近づくにつれJASCの歴史や、

意義がただただ自分に重くのしかかっていた。自分に何かに発信できるものはあるか？エリートとしての使命？忙しい学校生活すら満足にこなせていけない自分にはほど遠い言葉に思えた。

また数少ない地方参加者の一人ということも一つの不安要因であった。

自分の大学の授業の質や機会の数、学生のモチベーションなど、JASCと比べてしまったらやはり大きな差があった。

本当にやる気も能力も高いみんなに会えて、脳が日に日に活性化される刺激を感じる一方、JASCにどっぷりつかってしまったら、ますます自分のこれからやっていく環境に対して否定的になってしまうんじゃないかという不安が終始ついて回った。だからといってこのチャンスを無駄にしたくない、帰ってから自分の場所でどんな風にこの経験が生かせるのという答えをずっと模索し続け、見つけれずいた。

フェアウェルでこのことをOBの方に話すと、「それならば山本さんの情熱で、ここで学んだこと、吸収したことを今度は地元や地方に住む一人でも多くの人に伝えていくことが大事なんだよ」とおっしゃってくださった。世界にこんな問題があるんだということ、それに向けて自分達にもこんなことができるということ、学生にこれだけできるということ、日米学生会議にかかわる皆の熱意や高い意識、国際交流の楽しさ、私には今みんなに伝えたいことがいっぱいある。これをどんな風に伝えられるかまだ考えきれていないけど、何らかの形で、地元の皆や、中高生に伝えていくことで、社会に還元していく。

また、この日米学生会議で身をもって学んだことは、アメリカ側実行委員長Morganが秋田のリフレクションでしてくれたこの言葉。

“Take risks if you want to get the most out of it”だ。

この言葉はJASC中自分の行動を大きく変えてくれた。

JASCの意義や自分の役割にとらわれることなく、自分がその場でできることを精一杯やろうという気持ちに変わっていた。

それでもうまくいかないことがあったり、消化不良に陥ることは多々あった。そんな時わたしを励まし続けてくれたのは、JASCERのみんなの一挙一動だった。

積極的に質問したり、スピーチに挑戦したり、いろんな遊びを提案したり、常に挑戦し続けるほかのJASCERの姿は本当に励みになった。

会議中考えたこと、学んだことはここには書ききれないほどある。

しかし一番の収穫は、その人たちが世界のどこかで頑張ってるんだって思うだけで自分も頑張ろう、自分も前向きにチャレンジしてみようって思えるような仲間がたくさん出会えたことだ。

後悔がないかといえば、大嘘になる。後悔は大有りだ。

本当はもっともっとデリのみんなといろんなことを話したかったし、自分の無知さや英語力、人とのコミュニケーション力などなどへこむことはたびたびあった。もっと挑戦できた場面もたくさんあった。でもこの悔しい気持ちがこれから私の人生の中で大きな原動力になると思う。

リスクを負う。挑戦する。最大限を得るために。

この気持ちをいつも胸に、これからがほんとうのスタート。

最後に・・・

このJASCという最高の場所で一緒に過ごした最高のみんなへ
本当にありがとう！！

そしていつか、福井に遊びに来てね！

吉川真由

細胞や遺伝子、食品成分についての多少の知識はあっても、世間や社会の動きに疎く、教養や常識を持ち合わせていない私にとって、日米学生会議に参加し、英語で議論するということは大きな挑戦で

第5章 参加者の声

あった。開発分科会に属していたが、日本語でもなかなか理解したい内容を果たして英語で議論できるのかという疑問を抱えながら私のJASCは始まった。

アメデリが到着するまでの事前研修の2日間が一番不安だった。日本が初めてのデリもいるアメリカ側と違い、この住み慣れた土地、日本でそんなに刺激的な経験ができるのだろうかという疑念がいつも心の中にあっただ。しかし、アメデリを見た瞬間、その疑念は一気に吹き飛んだ。まるで魔法にかけられたように、日本ともアメリカとも言えない世界がにわかには出来上がった。

普段見慣れている町もジャスカーと行動するとまったく違って見えた。分科会での討論をはじめ、観光、フォーラム、イベント、そして日々の生活までもが新鮮な発見の連続だった。

特に同じRTメンバーとは共有した時間が長い。

事前勉強会も含め、話しに話した。時にはぶつかり合ったり、時には冗談を言ったりしながら。果たして私たちが議論した成果の行方は・・・？

私自身は、分科会での話し合いが日本やアメリカ、世界に影響を与えるだろうとは最初から期待していなかった。

今世界中の専門家たちが、例えば開発問題について考えている中で、私たちが1ヵ月やそこらで話し合った結果がそう画期的で有り得ようか？けれど、誤解しないでいただきたいのは、この議論は大いに意味があったということである。

1ヵ月間も同じ釜の飯を食べ、こんなにも真剣に議論をする経験は後にも先にもありそうにない。私にとって、ジャスカーと赤裸々に、そして真剣に世界を考え、議論をできたこと自体に大きな意味があると思う。きっとジャスカーはこれから世界を引っ張るリーダーになっていくだろう。今回の経験がお互いの理解を深め、一生ものの友情を育ててくれ

た。これから先の、日米の関係に橋が架かったのだ。将来「やあ」といってまた一緒に活動をできる日があることを楽しみにしている。

JASC最終日、「起きなさい」と夢から覚まされる思いがした。もう少し眠っていたかったが、また日常が舞い戻ってきた。いや、やっぱりJASCは夢ではなく、確実に現実だった。

李 凌叢

JASCはどうだったのか、JASCで何を得たのか、JASCとは何か。JASC経験者が一度ならずとも自分に問かける質問だ。他者から、積極的な答えを求められる質問でもある。そんな質問との対峙が、時にはJASCと化し、時にはJASCを盛り上げ、そして時にはJASCを損なう。

本会議がスタートする以前から、JASCは楽しかった。春合宿でお互いを知りあい、いくつもの勉強会・飲み会を経てその人々が仲間と化していく。大学に入り、クラスなどのグループの繋がりが薄くなり、個人個人の関係が主流となる中、「仲間」という概念は懐かしく、居心地がよかった。腰を下ろして深い話をするだけでなく、ワイワイとバカ騒ぎもできる。何も求められてなくて、存在が許される、居場所が自然とある感覚。それがJASCだと思う。本会議が始まり、スケジュールや寝食を共にしていくなか、更にそんな仲間気質は深まったように思われた。大人数でのパーティー、少人数での真剣な議論、とにかくどこかに行けば人がいて、自分がそこに入れるという感覚があった。みんながオープンで、より多くの人と話そうとしており、お互いに気を遣いあっていた。一人でいるとぼんっと肩を叩かれて会話に引き込まれたり、祭りに着ていく浴衣がないと思えば誰かが貸してくれたり、とにかくみんな楽しんでいう精神が満ち溢れていた。

そんなフレンドリーさが充満した環境は一方で、プレッシャーをも引き起こすものであった。あまりにも周りが充実しているように見えるから、自分が物足りなさを持っていることに対して疚しさを覚えてしまう。なぜ自分は100%じゃないのか焦燥感を

覚える。楽しむために自分に無理をさせる。楽しもうという努力をするあまりに、気持ちが空回りをしてどんどん取り残されていってしまう。そんな風を感じる参加者は多かったように思えた。私もその一人であった。会議日程が終盤になるにつれ、これまでの会議に関して感想を求められるようになる。自分の気持ちを適切に表現できなくて、「楽しかった」などと一般的なフレーズで会議を締めくくりたくなくて、なにより、率直な感情から隔離された美辞麗句で会議を距離のあるものとして認知させたくない思いが複雑に絡み合い、私は批判やネガティブな意見しか口に出来なくなっていった。

JASCとは何か。それは楽しさや挫折感、模索や感銘、1ヵ月間で人が体験しうる全ての感情をひっくりめたものだと思う。それは多分人生と一緒に、みな終局的な幸せを求めて躍起になっている場所。冒頭にあげたような質問に対する焦りのあまりに、一つ一つの瞬間を楽しめなくなってしまうと思う。答えが見つからないからといって、全てを否定してはいけないと思う。肯定するもの、否定するもの、改善していくもの、全てを真っ直ぐ見つめて、正しく表現していかなければならない。ここは桃源郷でもネバーランドでもない、人生の継続の中の一部である。人生を生きるように、JASCを生きる。

It's your life, it's up to you how to live it.

渡辺恭子

第59回日米学生会議（JASC）に挑むことを決めてから、終わった今、この経験を感想としてまとめるのは困難だと感じている。強いてこの感情を表現するならば、文字や文章という“枠”に収めたくない。という感覚だろうか。この夏を思い出にはしたくないという寂しさがそうさせているのかも知れない。

思えば、JASCに応募すると決めてから、晴れて参加者となった後も、私はずっと迷っていた。自分自身の意思で参加したいと思い応募した日米学生会議だったが、合格通知を受け取ったの束の間の喜びの後、不安が押し寄せてきた。1ヶ月近くにも渡る集団での生活をうまく過ごせるのか。ディスカッションをするだけの英語力・知識が足りるのか。様々

な思いが入り混じり、辞退すら考えてしまうこともあった。自分自身にとってのJASC、JASCにとっての自分、それが分からなくて、自分の答えが出せなくて、ずっと自分がJASCに参加していることに違和感を抱いていた。しかし、私は、現実から逃げていた。大事なものは、先の不安ではなく、今この瞬間に向き合うこと、自分自身に向き合うことだった。出来ないこと、やりきれないこと、知らないこと、分からないことはたくさんある。でも、分からないことを悩んでもしょうがない。自分に今、何ができるのか。悩むよりも、行動し変化を起こそうとすること、それが一番私には足りていなかった。

そもそも参加したいと思った理由は、広島で平和を考えるシンポジウムを開催する活動をしていた事もあり、全国の学生が、ヒロシマや平和についてどう思うかを持っているのか興味があったから。偶然見かけた、参加者募集のリーフレットに書かれていた暴力と平和の分科会、まさに私がみんなと考えたい事はこの分科会にあると思った。実行委員を含み、多様な価値観を持って集まった日米の学生10人。ディスカッションでは、意見が割れる事もあった、しかしながら、お互いがお互いを尊重し自由に意見を言える場がそこにあった。真剣に、時におおふざけ。最高の分科会、最高のメンバーに出会えた。それだけ、最高の場、人に出会えたからこそ今、正直やり残した事とを感じることはたくさんある。英語が分からなくても、もっと自分の意見を言えばよかった、もっとディスカッションをすればよかった。もっと、もっと。そういう気にさせてくれる、本当にモチベーションの高い、そして素晴らしい人たちが集まっていた。

第58回の報告書で見つけた“Life Changing Experience”という言葉。第59回でもその言葉をよく耳にした。私にとってのJASCがそういうものになったかどうかはまだ分からない。ただ、このJASCに参加することで考えた事、悩んだ事、普段は出来ない素晴らしい経験の数々、そして大切な仲間と過ごした時間、全てが今の自分を作り、そしてこれから先、自分自身に影響を与えるものだという事は確かだ。会議実現まで企画・準備をしてきた実

第5章 参加者の声

行委員のみんな、活動を暖かく見守り、支えてくれたすべての方々に心から感謝の意を表したいと思います。そして、今JASCへの参加を考えている人へ。普段とは違う経験をしたい、かけがえのない夏をつくりたい、素晴らしい仲間に出会いたいと思うならば、是非応募してください。この会議に参加することで得られるものは無限大、すべては自分次第です。やろうと思えばどこまでも出来る場がJASCにあります。